会誌1号

【目次】

会長挨拶	---	1
推奨のことば	---	2
志賀哲太郎について	---	3
「志賀哲太郎小傳」抜粋	---	11
資料で辿る志賀哲太郎の生涯	---	16
台湾大甲訪問記	---	35
台湾の新聞「台中報道」の記事	---	36

志賀哲太郎顕彰会

平成 29 年 3 月

■ 会長挨拶

会長　　**宮本睦士**　（益城の歴史遺産を守る会会長・元小中学校校長）

昨年４月の熊本大震災において、犠牲となられた皆様に深甚なる哀悼の意を表しますとともに、家屋の倒壊等、様々な形で被害をお受けになられた皆様に心からお見舞いを申し上げます。

私達は、益城町出身の偉人・志賀哲太郎先生の功績を顕彰し、益城町民の皆様はもとより、熊本県内外に志賀先生のことを広く知っていただくため、一昨年、町内外の有志により本会を設立しました。

現在、益城町当局を始め、熊本県や関係諸団体の御支援を頂きながら活動を行っております。

昨年は、志賀先生の生誕 150 年記念講演会を益城町文化会館で行う予定でしたが、熊本大震災により延期を余儀なくされ、本会の活動も休止しておりました。しかし、昨年末、あらためて、活動の再開を確認し合ったところです。

志賀哲太郎先生は、その活躍の場が台湾であったことから、地元の益城町においてもその人となりを知る人は殆どありませんが、先生が半生を過ごされた台湾においては、「大甲の聖人」と呼ばれ、今日の台湾の礎を築いた偉人の一人として、今なお、台湾の人々に敬われ、その遺徳が語り継がれています。

先生は、益城町田原の出身で、幼少より俊英にして四書五経を学び、長じて陽明学に触れ、仏教、法律、英語をも研究され、また、中国の革命家孫文の三民主義に深く影響を受けられたようです。台湾における先生の振舞いは、慈悲に満ち、公平無私ですべてにおいて献身的であったと伝えられていますが、崇高な教育者としての生き方は、これらの学問的経験が渾然一体となって発揮されたものと思われます。

そのような先生の功績を顕彰するために設立された本会ですが、ここに至るまでには、様々な偶然のつながりがありました。

まず、当時、自民党の青年局長（台湾との国交の窓口）であった木原稔衆議院議員が先生のことに詳しく、随所で顕彰活動をし、本会の一部会員にも常々啓発をしておられたこと。次に、益城町でも有数の事業家である紀伊進氏が大甲出身であり、40 数年前（昭和 49 年）に川口外一益城町長や坂口主税熊本市長らとともに顕彰会を設立され、現在、志賀哲太郎研究の定本となっている「志賀哲太郎傳」を刊行しておられたこと。さらに、調査を進める中で、先生の妹ミノさんの孫・澤田寛旨先生（熊本国際教育を進める会名誉会長）と巡り合い、家系、墓地や遺品の所在等が判明したこと等々、それらはまさに、先生の導きにより、幾つかの糸が撚り合わされていくようでした。

今一つ付記すべきは、初代会長松野國策先生が昨年末に御逝去なさったことです。熊本県歴史学研究会の会長を長くお務めになられた松野先生は、郷土史家として活躍され、志賀哲太郎先生のことにも詳しく、その顕彰に意欲的に取り組まれ、大きな成果を遺して来られました。松野先生の御命日は、奇しくも志賀先生と同じ 12 月 29 日でした。松野先生に対しあらためて感謝と哀悼の意を表し、謹んで本誌発行についてもご報告したいと思います。

ともあれ、志賀哲太郎先生の顕彰活動は、単に教育的文化的事業に止まるものではありません。一昨年 10 月、熊本と台湾高雄間に定期航空便が就航し、台湾と熊本の距離が縮まり、県内でも幾つかの市町村が日台交流を推進しつつあります。益城町においても、教育的文化的事業のみならず、観光、物産交易等についても、幅広い事業の展開が期待されます。

本会では、顕彰活動を通じて、関係機関の御指導と御支援を頂きつつ、関係団体の皆様に、益城町の発展に寄与できるような様々な提案をして参ります。

今後とも、益城町内外の多くの皆様の御理解と御協力をお願い申し上げます。

■ 推奨のことば

本会顧問　**坂田敏昭**　（益城町教育委員）

昨春の熊本大震災により、私たちの故郷、益城町もまた大きな痛手を負いました。そのことはまことに痛恨の極みですが、復興に向けた活動が徐々に進められつつある今日、できるだけ前を向いて歩いて行きたいものです。

災害の復興には、一人ひとりの小さな努力の積み重ねが必要であることは言うまでもありませんが、これほど大きな災害を受けますと、それだけではとても対応して行けるものではありません。

私たちにとって最も大切なことは、互いに協力しながら、町民一丸となって復興に取り組んでいかなければならないということを、皆が理解し、自覚し合うことです。

そのためにも、このような機会にこそ、災いを福となすべく、今一度、私たちの愛する故郷をあらゆる面で顧みてみたいものです。

志賀哲太郎顕彰会が発足して３年目を迎えました。

本会の事業は、ささやかではありますが、教育・文化事業だけでなく、国際交流に関連した幅広い分野において、事業を展開することが期待できると考えています。災害復興の色々な事業も含めて、やがて、私たち益城町民にとって、誇りと希望をもたらすものであろうと期待しています。

志賀哲太郎先生のことは、調べれば調べるほど、その人格的なすばらしさを思わされ、あらためて日本人の生き方の理想像を見る思いがします。

先生が最も活躍された舞台は、日清戦争後わが国に割譲された台湾でした。明治から大正にかけた26 年間を、この上もなく誠実に生きられました。台湾の人々に対して示された志賀先生の慈愛に満ちた振る舞いは、人としての平等の精神に基づいたもので、当時としては稀有なことでしたが、この普遍的な崇高な思想がどこから生まれてきたのかを、多くの人に知っていただきたいと思います。

志賀先生は津森の出身ですが、このような偉人が私達の郷里から生れ出たことを今更ながら有り難く思います。子供達の教育にとって、身近に仰ぎ見る先人がいるか、そうでないかには雲泥の差があり、大人もまた、例外ではありません。

学校教育においても、社会教育においても、志賀先生の遺徳を学び、益城町が、また、熊本県が誇りとすべき先人であることを広く発信していきたいものです。

益城町の復興への道のりは決して容易なものではないと思いますが、志賀先生のことを学ぶことは、このようなときにこそ有益であろうと思います。先生の教えは、きっと、この先の困難な道程において様々な道標を示し、励ましを与え、よりよい方向へ導いてくださるものと信じます。

皆様もともに手を携えてこの事業に御協力を頂き、それぞれに益城町の明るい未来像を描くことができましたら、これに過ぎる幸いはありません。

■ 志賀哲太郎について

本会アドバイザー　**澤田寛旨**　（熊本国際教育を進める会名誉会長・元小学校校長）

志賀哲太郎は、私の祖母ミノの兄であり、大伯父に当たる。私も教育者としての道を歩み、国際教育活動にも従事してきたが、「大甲の聖人」として敬愛されている大伯父の事績を辿るにつけ、多大な啓発と多くの示唆を受ける。

ここに、新聞記事や写真等を提示しながら、志賀哲太郎の人となりを紹介して参りたい。

先ずお読み頂くものは、昭和51年３月31日、熊本日日新聞に掲載された福本敬介氏の寄稿文である。

熊本が生んだ台湾・大甲の〝聖人〟志賀哲太郎

志賀哲太郎。明治から大正にかけて台湾にあって異境の子弟の教育に一身をささげた郷土の先人である。熊本にも顕彰会が組織されているが、その名はあまり知られていない。しかし、台湾の現地大甲にあっては〝聖人〟として尊敬されているという。ここにその足跡をたどり、あわせて台湾に滞在して郷土の先人の顕彰に力を尽くしている日本農業科学研究所長の福本敬介氏（球磨郡深田村出身）に一文を寄せてもらった。

「民族を超え、愛そそぐ―志賀先生という人―」　福本敬介

志賀哲太郎は、慶応元年、上益城郡益城町津森の生まれ。幼いころから漢学に親しみ、青年期に上京して東京法律学院で法律を学んだ。その後帰郷して、紫溟会国憲党古荘嘉門、佐々克堂、安達漢城らの門に投じ、九州日日新聞の政治記者として活躍した。しかしこの間に仏門に深く帰依し、明治２８年に政治と絶縁。翌２９年、日清戦争の講和条約で日本に割譲された台湾に渡った。そして３２年から台中県大甲の大甲公学校で代用教員として教壇に立ち、台湾人子弟の教育にその半生をささげ、台湾に骨を埋めた。

生涯を単身で過ごし住民と暮らしを共にし、台湾総督府の圧政の中にあって、常に住民側に立って、相談相手となっていたという。このため住民や子弟から慕われていたが、総督府の圧政と台湾人子弟の板挟みとなり、大正１３年１２月２９日自決して果てたという。しかしその遺徳は没後５０年を経た今も、忘れられることなく教え子たちによって守り育てられており、昨年１月、その顕彰記念碑が現地に建立されている。

今から５年まえ、早春の晴れた日のことである。私は台湾大甲の長老呉淮水氏に案内され、熊本県出身の日本人の墓があるという、鉄砧山（てっちんざん）のふもとにたどりついた。「ほれ、あの小高いところに見えますのが、恩師志賀先生のお墓ですよ」。見ると百メートルほど向こうに、なだらかな相思樹の緑を背景にして、ひときわ目立つ大きな自然石の墓碑が目に映った。

戦後、台湾にある日本人の墓は、大使館によって一カ所に集めて供養するというたてまえで、全部取り壊し、遺骨は日本に持ち帰ることになった。乃木大将母堂の墓、総督の墓、その他日本人の墓が、ことごとく取り壊されたのはこのときである。

この通達があったとき、志賀先生の教え子たちは緊急会議を開き、代表を大使館に送った。

「志賀先生は日本人に違いありませんが、私たちの恩師です。大甲の聖人として尊崇の的になっています。お墓も私たちが建てたものですから、先生の墓は絶対に動かさないでください」。目障りになる日本人の墓は早く取り壊してしまえ、という現地の空気のなかで、正反対の要望に対して大使館側はいささかとまどったらしいが、結局は代表の熱意にうたれて残すことになったのである。

「志賀先生之墓」に私が親しく参拝したのは、この日が初めてであった。

志賀先生の教え子たちは、先生が亡くなられて５０年たっても先生を慕い、先生の生誕百年を記念し、昭和４１年に墓前祭と追憶の宴を行っている。生き残っている教え子たちが世界の各地から百余人も集まり、記念事業として祈念碑の建立、伝記の出版、映画化などを決議し、その実現に努力していることを知った。

私は昨年１月１９日、この記念碑の除幕式に参列する機会を得たが、今は年老いた教え子の人たちが、墓前に香華を供え、記念碑の前にひざまずき、涙を流しながら祈る姿を見て、万感胸にせまるのを禁ずることができなかった。

その時、台湾の代表者のあいさつのなかに、次のような言葉があった。

「どこの国の人々も、自分の国がよりよい国になることを願っています。そのためには、国境をこえて、お互いが仲良く助け合って行こうとする気持ちが大切です。志賀先生が生きておられたころは、台湾にいる日本の方々はほとんど威張っていて、中国人をけいべつしたりいじめたりしていました。しかし先生は一切差別がなく、温かく教えてくださいました」

その頃の台湾は日清戦争で日本の領土となり、日本人の移住者も年々増えていた。

しかし、同じ仕事をしても、中国人という理由で、もらえるお金は半分以下であったり、人力車に乗っても、しかりとばしてお金を払わない日本人もいた。現地の人が日本人に対し憎しみをもつのも無理はなかった。ある地方では全体で、そこにすむ日本人に反抗したので、軍隊の力でこれを抑えたこともある。

そのようなときに、日本人も中国人も同じで、お互いに尊敬し、友情を深めねばならないと、固い決意で現地の人の教育に当たられたのが志賀先生であった。

志賀先生は、慶応元年に熊本県上益城郡津森村（現在の益城町）に生まれ、明治３２年に台湾の大甲公学校に奉職されている。

そうして大正１３年５９歳で死去されるまで、２６年間無欠勤、無遅刻で台湾子弟の教育に献身されたのであった。

その頃の台湾は、親たちがまだほとんど教育に理解がなかったし、平気で欠席する子も多かった。先生はそんなとき１０キロも１５キロも歩いて両親に教育の大事なことを話して聞かせ、必ず出席するように説得に努めた。また病気欠席の子がいると、絵本や果物などを持ち、熱帯の焼けつくような石ころだらけの道を、１時間も２時間も歩き汗だくになって見舞いを欠かさなかった。こうした先生の熱意は転勤を強要されない雇い（代用教員）としての身分に甘んじ、その生涯を大甲の人々に尽くされたことからもうかがい知ることができる。

大正１３年、志賀哲太郎先生が５９歳の生涯を終えられたときの葬儀ほど、先生の人となりを雄弁に語るものはほかにないと思う。

大甲の人たち、教え子は無論のこと、その父母や縁者、なんのゆかりもない路地裏の人々までが、台湾に前例のない神様を送る「道祭」をもって、鄭成功ゆかりの鉄砧山ろくに厚く葬ったのである。

私は、風光明媚（び）な鉄砧山に、早春の日が長い影を落として沈むまで、先生の生涯を感動をもって語ってくださった７５歳の教え子、呉淮水氏の目の輝きを忘れることができない。

（日本農業化学研究所＝台北市＝所長、球磨郡深田村出身）（※誤植等一部修正）

熊本日日新聞には、志賀哲太郎に関する記事が数回掲載された。

- 昭和 42 年　「映画化される大甲聖人」
- 昭和 44 年　「志賀先生の霊安かれ」 ― 26 年間の師弟愛今も ―
- 掲載年不詳　「教え子らが生誕百年祭」― 台湾の志賀氏 ―

左の写真は、大甲村の文昌廟（学問の神様・文昌帝君や孔子等を祀る廟）で、初期の大甲公学校はここで開校された。（明治 32 年撮影）

明治 43 年に三堡に新校舎が建てられ、生徒数 300 人、教師 20 人ほどに増えていった。

学校では、修身、国語、作文、算術、習字、音楽、体操の７課目の授業が行われた。

志賀は、文昌廟の一画を6畳二間の日本式に改造し、粗末ながら、そこを住居とした。

当初、公学校の生徒は 40 人余りで、4学年制。本堂前に 1 学級、両側に 1 学級ずつの 3 学級の複式授業が行われた。

教師は金子政吉校長（茨城県出身）と台湾人教師・汪清水、志賀の 3 人だった。

黒板はあったが、主に石板と石筆が使われた。後になって、鉛筆が使われるようになった。

志賀哲太郎は、当時、教育に殆ど理解と関心のなかった台湾の人々に教育の大切さを説いて回り、私財を投じてまで教育の普及に努め、台湾の子供達を我が子のように慈しんで育てたと言われている。また、地域の人々に接するに当たっては、「一視同仁」、少しも差別することなく、どちらかと言えば、優越的な言動をしがちな邦人もあった中で、常に台湾の人々に寄り添う生き方をしたようである。

そのような志賀の努力はやがて実を結び、大甲区の公学校（台湾人の小学校）は、台湾全土でも類を見ない就学率と進学率を誇ることとなり、総督府でも、代用教員であった志賀に正規の教員になることを再三勧めるが、志賀は、官服では本当の教育はできないとして、26 年間の長きに亘って代用教員の地位に甘んじ、恬淡として教育の本質を貫き続けたのである。

時代が大正に移り、国内ではデモクラシー運動が普及する中、世界的にも民族自立の潮流が各地で沸き起こり、台湾でも反政府運動が頻発するようになる。志賀は、教え子の中からそのような活動家が生じるにつれて、地域の人々と総督府との板挟みになり、苦悩の日々を送った末に終に自決するに至る。

心の支えを失った地域の人々や教え子たちの悲しみはひととおりではなく、その葬儀の列は 1km を越えたと伝えられている。そして、その遺徳は、今日に至るまで語り継がれ、敬われているのである。

志賀哲太郎は、台湾台中県大甲村の大甲公学校において 26 年間勤務したのであるが、官服を着て剣を吊り、数年毎に転勤を繰り返していては本当の教育はできないとの思いから、和服で通し、代用教員の地位を何ら気にすることなく、自らの教育信念を貫いたのである。

教え子が師範学校を卒業して帰って来ると正教員として志賀より上席となったが、志賀は平気で、「おれは御のつく雇いで台湾の御雇いだ」などと笑っていたようである。

左の写真は、大正 13 年に撮影されたもの。この後、12 月 29 日早暁、大甲の水源地に身を投じて 60 年の生涯を閉じた。紋付羽織袴の正装で、下駄をプールのふちに揃えてあったと言われており、覚悟の自殺であったことがわかる。

志賀の葬儀は、正月を控えていたため、死去の翌日、公学校の校庭において急遽行われた。座する者のない筈の遺族席には教え子の長老たちが先を争って着座した。読経が始まると随所に啜り泣きの声が聞かれ、弔辞を読む人が嗚咽するごとに悲しみは更に深まり、教え子代表の呉淮水氏が弔辞を読むときは、皆声を上げて泣いたという。

【教え子代表・呉淮水氏の弔辞】

大正十三年十二月三十日、故志賀先生の御霊前に、大甲公学校出身門下生謹みて一言を告ぐ。先生は明治三十二年二月、本校に教鞭を執られ、当時の台湾、当時の大甲、悪戦苦闘二十有六年、一生一代をつくして今日における先生の大甲を建設せらる、その結果、我が大甲は血気旺盛なる青年の毛髪を白く染め当年の意気奪い、遂に悩殺して、今や鉄砧山麓に老骨を葬らんとす、嗚呼哀しいかな。聞けば往事、先生は現時中央政界に時めく政客と共に学び、共に出廬し、天下を呑まん勢なりという。その後、感ずるところありて植民地教育に投ぜられ、爾来同一の目的、同一の場所、同一の主義の下、終始一貫、二十六年を一日の如く勤続し終りたり。廟堂に座し、国事に奔走し、天下に号令す、大丈夫の本懐たるは不肖これを知る。彼、高楼に入り、我れ情誼の校舎に記居す。彼、巨万の富を有するに対し、我れ数千の門下を擁す。国事に尽して可なるも、人材培養に尽すは更に可なり、国家に尽すは一にして、孰れが貴きか未だ量る能はず、不肖等、不幸にして神を識らず、只至れる人として先生を信じ疑わざるものなり、然るに名慾利情に勝つ先生は、終に健康に勝てず、今や再び芳顔を拝する時なし、志賀死すとも徳は死せず、不肖を薫化して千載に至らむとす。願わくば安らかに眠り給はむことを。

門下生　　呉　淮水　敬拝

志賀哲太郎のエピソードを、桑野豊助著「志賀哲太郎傳」（昭和 49 年　志賀哲太郎先生顕彰会発行）から拾ってみたい。（原文のまま）

◇

先生の履歴書には学歴ナシとなっていた。四書五経から王陽明学まで学び、明治法律学院にて法律を専攻した先生が、学歴ナシとした理由は、学歴を書けば必ず任官させられる。文官服に剣を下げて教壇に立つようでは教育の本旨に反する。それに命令一下、何処へでも転勤させられる。先生は大甲を愛し、大甲の人々の人情に融け込み、一生を大甲子弟の教育に捧げ、この地で終る覚悟をきめてのことであるから、学歴ナシとされたもののようである。

先生にして若し栄達を望まれるならば、友人の濱口雄幸が総理大臣、安達謙蔵が内務大臣として時めいている時に、求められるなら必ず要職に就き得たであろうに、敢てそれをしなかったのは、所謂肥後モッコスの一つの現れではあるまいか。威武に屈せず、富貴に淫せざる先生の真骨頂は常人のよく想像するところではない。

◇

或日、同郷人米村嘉平が故郷熊本から届けられた新聞を読んでいたが、彼は腰を抜かさんばかりに驚いた。志賀先生のことが書かれているからだ。古荘嘉門先生の死を報じ、佐々克堂、安達漢城、志賀哲太郎先生等の同志と共に藩閥政府と戦った古荘博士の記事である。米村嘉平はその新聞を友人は勿論、学校にまで持ち込み見せて歩いた。

あの温厚な先生が松方内閣の選挙干渉に屈せず、濱口、安達先生等と共に全国各地を遊説して廻られたとの記事は、読む人をして、果たして同一人であるかと疑わしめた程である。

教え子もその記事を読み三人の代表を選んで、先生を宿舎に訪ね、先生にこんなえらいことが書いてあるが、この志賀哲太郎は先生ですかと詰め寄ったら、先生も詮方なく「そうだ」とうなづいたということで、成程、変っている、偉いはずだ、他の先生と違っているのも当然だと納得し、学校内は勿論、街の噂にも上った。

◇

日常生活は禅僧の如く厳しいものがあったが、決して窮屈な所はなく、生徒や父兄、街民とはよく親しみ、よく飲み、よく語られた。

昼は学校、得意な課目も不得意な課目、体操まで熱心に教えられ倦む所がなかった。

夕飯時には毎晩、晩酌を欠かさず、それも大抵台湾産の紹興酒が主だったようで、淘然として酔い、後は読書、それから座禅と正しい日課であった。禅僧のような生活で忠婢ソデと起居を共にしながら遂に一生を女色から遠ざけられ、独身を通されたことは、この座禅により凡ての煩悩を克服されたものと思われる。

酒と共に釣を好まれたようで、教え子と共に大安渓にてよく釣を楽しまれた。海も近く、川に挟まれ、魚に恵まれ、野菜や果物もうまく、人情味も豊かな所で、教え子から慈父の如く慕われでの生活であるから、二十六年間は夢の如く過ぎたのではあるまいか。

◇

先生は常に修養につとめ、書斎には王陽明の「破山中賊易、破心中賊難」の自分で書いた座右銘をかけ、一日三省していられた。教え子にも「自分は三つの宝を持っている、だから何時も心は平穏無事だ、即ち一つは慈悲、二つは倹約、三つは謙遜であるといっていられた。事実、先生が怒ったことを見た人はない、故に聖人のようだと噂されるようになった一つの理由である。

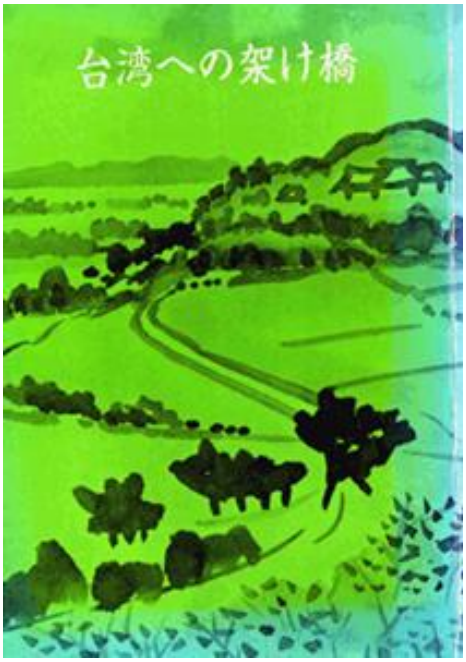
先生は教え子がよく可愛かったと見え、正月には何人かを招待されていた。卒業して何年経ってもかわらない。子供のいない先生は教え子を自分の子供のように沢山呼んで、盛んに御馳走する。飲んで、食べて、歌って、ドンチャン騒ぎをやる。先生はそれを共に楽しみ、共に喜び、共に祝う、宴が終った後は女中ソデと共に根気よく片付ける。

七十才を過ぎた長老連が集って、先生の話が出ると、皆一様に顔をほころばせてうれしそうに語る。この正月の招待の宴は毎年続いた。

◇

大甲の新年宴会は盛んであった。先生は必ず出席された。生徒の家にもよく招かれた。ある時教え子の招待で木藤という老郵便局長の前に座り、杯を交していた。局長は酒癖が悪く、始めは蜜柑の皮を投げたりしていたが、ついに杯を先生目がけてなげつけた。それが先生の顔に適中して、鮮血がたらたらと顔を血で染めた。席上の人はこの様を見て大騒ぎをしたが、先生は静かに顔面を拭き、泰然として飲み続けた。翌朝、酔のさめた局長はこのことを聞いて驚き恐れ入り、学校に飛んで行き先生に陳謝したが、先生は笑っていられたとのことである。

◆その他の書籍に見る志賀哲太郎の事績



「台湾への架け橋」　（蓬莱会関西支部発行）から抜粋

◇

何という偉大な教育者だったことか。50 余年たった今も先生の墓前には香華が絶えないという。戦後、教え子たちが墓碑の撤去を拒否して守りつづけた姿こそ、大甲聖人を敬慕してやまないあらわれであろう。

政界の顕職もすてて任官もしないで、一生代用教員に甘んじた行為は、普通一般人のできるところではない。教育にすべてをかけた志賀先生の高潔さがうかがわれる。

先生の赴任は、苗栗庁（びょうりつちょう）長の推薦によるものといわれている。先生は、入学児童の勧誘や出席督励によく歩き回って水牛に追いかけられたこともしばしばだった。

「大甲聖人　志賀哲太郎先生」（P.114～117）

「台湾と日本 交流秘話」（展転社）から抜粋

◇

日本人教師の墓と碑：　台中県大甲鎮は、台中市の西北三三キロに位置する静かな地方の街である。（中略）その街の郊外に鉄砧山という高さ二三六メートルの山がある。（中略）その山の南側山腹に、志賀哲太郎という日本人教師の墓と記念碑が建っている。台湾における日本人のものとしては、戦前から守られる墓石と戦後に立てられた記念碑はともに希な存在である。日本ではほとんど知られていないが、この人物こそ「大甲の聖人」と称えられ、その遺徳は今に伝えられているのである。その墓碑銘には「永久に尊敬を伝えるためにこれを記す」とあるから、その信望はたいへん厚かったようだ。

◇

慈父のごとし：　志賀が台湾に渡ったのは日本の台湾領有の翌年明治二十九年、彼が三十歳の時だった。その三年後、大甲街（現・大甲鎮）の公学校（台湾人子弟のための小学校）に代用教員として着任した。（中略）

彼は体が大きい上に強面、生徒は初めこそ怖がるが、やがてその心のやさしさに慈父のごとくに慕うといった具合で、例えばかれは貧しい子に対しては、文具がなければ買って与え、病気となれば菓子や絵本を持って見舞い、学費に困れば補助を出した。しかし教室では厳格で、怠ける子には叩きもするが、それは愛のこもったものだったという。

また、彼が訴えてやまなかったのは教育の重要さだった。日本領有直後の台湾では、住民の生活がまだ不安定で教育への理解が浅かった。そこで日曜日になると腰に弁当を提げ、例え遠隔の部落であろうと就学適齢期の子の家を訪ねてまわり、父兄や子どもに登校を懸命に勧めた。その努力と誠意は見事に功を奏し、学校は県下一の出席率を示し、進学率も群を抜き、やがて大甲が各界重要の地位に人材を多く輩出する基となった。

彼が礼節を重んじたことは有名で、「志賀仔有礼儀（志賀さんは礼儀正しい）」と敬われ、人と会えばいつまでも頭を下げるので、皆困ってしまったというエピソードも残る。また時間には厳格で、生徒の遅刻には罰を加えた。発意して学校に鐘を取り付け、住民にも時間の観念を与えた。彼自身も、在職中は無遅刻、無欠勤を貫き通している。

そして彼は、常に「慈悲・倹約・でしゃばらないことを三つの宝として教えていた」（墓碑銘）という。

正に硬骨明治人の真面目を見る思いである。

◇

その死の背景：　実は今から数年前、志賀の血縁者や歴史研究家がそれぞれ大甲を訪れ、かつての教え子らと会った際、「先生は命をかけて大甲を守った」という話を聞かされているのである。それはいったい何を意味していたのか。

当時、志賀は法律に蒙（くら）く、官憲による圧迫に悩む住民のため、その代弁者として随分と奔走していた。つまり彼は街のよき相談相手であり、指導者的役割を果たしていた訳だ。

役人側も、彼には内地や総督府高官に知己がいることを知っていたので、その要請は無下にしにくかった。官吏が台湾人側の味方につくことは大問題とされていた当時のこと、役人にとって、彼は目の上のこぶだったに違いない。学校側も彼の振舞いを喜ばず、しきりに転勤を勧めるなど、その排除を計ったが、彼の一視同仁の信念は揺らぐことはなかった。

世は大正に移り、台湾では住民の解放と自治を求める民族運動が活発化し、大甲にも早くからその余波が打ち寄せていた。彼もかつては民権を叫んで政府の弾圧に立ち向かった志士であり、愛する台湾人のために起ち上がりたいところだったが、いやしくも総督府の官吏であり、その節義も守り通さなければなら

ず、苦悩を深めていた。「大甲の聖人志賀哲太郎伝」の著者によれば、そのようなジレンマの中で教え子や同僚にも運動への挺身者が出るに及び、ついに真の日本人ここにありと、自決の挙に出たようだ、という。

「大甲の聖人・志賀哲太郎」（P.125～130）

◆海外研修「日華交流の翼」　　（熊本県国際理解教育研究会主催）

平成元年 12 月 23 日～27 日の４泊５日間、私が会長をしていた熊本県国際理解教育研究会の主催により、熊本市内の小中学校、幼稚園の教諭等 20 名（旅行社の添乗員１名を含む。）で、台湾を訪問した。

・趣　旨

国際化が進展する中、国際化を進める教育の重要性が強調されている。熊本県国際理解教育研究会では昨年８月、第１回の海外研修として韓国大田市を訪問し、両国の親善・交流に大きな成果を上げ、参加者一同感激した。第２回海外研修は、台湾 桃園県西門国民小学や大甲鎮を訪問し親善・交流を深めることにした。現在、アジアニーズを代表して経済成長を遂げている、親日的な国、台湾の訪問を通して国際理解教育の研修を目指す。

・概　要

大甲（市民会館で歓迎会・志賀哲太郎墓所参拝）、日月潭、高雄、花蓮（タラコ峡谷）、台北（桃園西門国民小学、故宮博物院）の要所を巡訪。

この研修旅行は、大甲鎮訪問と志賀哲太郎の墓参を林英雄大甲鎮長に、桃園県西門国民小学の訪問を陳金河校長に 依頼して実現した。大甲鎮長には、志賀哲太郎は私の大伯父に当たることと熊本県内の教師達の訪問であることを申し上げた。

西門国身小学の陳校長とは、昨年帯山西小学校を訪問されたときにお願いして了解を得ていたが、改めて正式に申請した。

（研修報告書から抜粋＝志賀哲太郎関係）

研修旅行の報告書

◇

台北空港から３時間余で大甲に着く。ここは人口約７万の地方都市である。今回の親善旅行の大きな目的地の一つである。それは〝大甲の聖人〟と仰がれる我が熊本の先達者・志賀哲太郎先生の遺徳を偲ぶ地だからである。

市民会館で歓迎会が催された。主催者は志賀先生の教え子たちである。助役の挨拶（「私の父も志賀先生の教え子でした」）に続き、教え子の李氏（78 歳）が話された。日本語である。この地における志賀先生の業績と教育者としての薫陶を語られた。そこには、教え子たちが何十年とたった今でも、尊敬し、報恩しようとする気持ちが脈々と流れている。李氏は私たちを前にして志賀先生を更に思われたのか、感涙されるほどであった。

◇

志賀先生のお墓を訪ねる。小高い丘の中腹にあり、遠望がきく。大きなお墓である、いや祈念碑といえようか。大甲の方々の志賀先生への心情が思われる。遠くに大甲の街並みが見下ろせ、今なお見守っているかのようである。私たち一同も一献し、礼拝する。同郷人として誇らしい気持ちである。　その後、李燕山氏の自宅に招かれる。大きな邸宅であった。

墓碑を建立した教え子達 （周燕、杜総朝、呉淮水、郭展享）

生誕百年記念碑

李燕山氏は貿易商で、「数年前に大雨で土砂崩れがあり、志賀先生の墓所が埋まったので、墓所の上に私の家の墓所を作り 土砂崩れを防いでいます」と言われた。見ると堅固な擁壁である。（右写真）

◆志賀家と澤田家の関係

平成2年、志賀家と澤田家の墓所を熊本市営桃尾墓園に建立。このとき、益城町津森にあった志賀家の墓も移転した（志賀家の墓は以前から澤田家が管理していた）。顕彰碑も併せて建立した。

私の祖母ミノ（故人）は志賀哲太郎の妹で、志賀の母親ジュカは、澤田の家で看取った。

以後数十年、志賀家の墓５基は祖母から母へと引き継がれてきたが、私が熊本市に居住したため、上記の墓所を建立した（墓碑の２基建立については、特に熊本市に依頼して許可いただき感謝している）。

志賀哲太郎から私の父に沢山の書籍が送ってきていたので、父が友人達に呼びかけて「輪読会」をしていたということである。この青年達はやがて村（旧津森村）の指導者となり活躍した。父は、満鉄に入り朝鮮各地の駅に勤務し、平壌駅勤務時に死亡した。私は、祖母から大伯父のことをいつも聞かされ、教師を志すようになったが、国際教育の推進に関わってきたのは、大伯父の影響だと思って感謝している。

前述した「日華交流の翼」は、私が企画し提案して実現したもので、大伯父の墓参ができ、教え子の李燕山氏とお会いできて感激した。

インターネットで「志賀哲太郎」を検索すると、沢山の方が大伯父について発言しておられる。また、大伯父の傳記本への問い合わせもあった。展転社刊「台湾と日本　交流秘話」の共著者・永山英樹氏は資料収集のため拙宅に来訪されたが、後日、数度にわたり貴重な情報をいただいた。

「熊本国際教育を進める会」のホームページに志賀先生のことを出したのは、多くの方が関心を持っておられる「志賀哲太郎先生」について私が持っている情報をお伝えしたいと思ったからである。

■ 「志賀哲太郎小傳」抜粋

本会発行物編集部会長　**松野陽子**（益城町文化財保護委員）

本会では、志賀哲太郎先生の顕彰を行うに当たり、新たな伝記の出版を企画し、私がその主筆を担当することとなった。

志賀先生については資料が少なく、伝記としては、昭和 49 年に刊行された「志賀哲太郎傳」が唯一のものであり、当時も、取材に苦労された様子が窺われる。

今回は、この伝記の内容をベースにしながら、顕彰会のメンバーが訪台時に収集した資料のほか、インターネットにより新たに発掘した資料をフルに活用し、志賀先生の生涯をできるだけ詳細に辿れるように構成した。

資料発掘に当たっては、本会アドバイザーの増田隆策氏（郷土歴史研究家・元山都警察署長）の調査力に負うところが大きく、それによって、本書の資料的価値も格段に向上したと思われる。

以下、一部を適宜抜粋し、本書の紹介としたい。

［**一　生れ故郷**　から］

志賀哲太郎の父志賀甚三郎は、上益城郡河原村(現阿蘇郡西原村)に生まれた。若い頃から鍛冶屋(かじや)業を手伝っていたが、田原村で鍛冶屋が不足していたことから、安政年間に知人の紹介で、田原村の郷士中村傅兵衛の屋敷内の空き家に移り住んだ。甚三郎は、その空き家を住居と鍛冶の作業場を兼ねた家に改造し、鍛冶屋を開業した。すぐ東隣には浄信寺があり、西隣には中村家がある。現在では、志賀家の鍛冶屋跡は無くなり、中村家の納屋が建っていたが、その跡地周辺の畑からは、時折、鍛冶の鉄片や金屑が出てくることがあった。　(注：　平成二十八年四月十四・十六日に起きた「熊本地震」で、写真の右に写る納屋そして中村家の納屋も倒壊し、また、写真のツヅラ積みの石垣も一部崩壊した。)

若い頃から甚三郎の鍛冶の腕前は確かであり、鍬・鋤の鍛造、鍋・釜の修理などを手掛け、誠実な人柄で近隣の評判は良かった。母ジュカは律義で気丈な女性であった。夫の仕事を手伝いながら家事や畑仕事にも精を出した。このような家庭環境に産まれ育った哲太郎は、小さい頃から、父母の手伝いをして家事を助けた。

明治二（一八六九）年四月二十九日、妹のミノ（志賀家の長女）が生まれ、明治五年九月八日、二女のエジュが生まれている。

哲太郎は、小さい妹を連れて友達とよく木山川で釣や水遊びに興じた。哲太郎は魚釣りが得意で、ハヤ・鮒・ドンコ・鯰等を良く釣った。仲間の子どもたちは哲太郎に釣りのコツを教わった。川岸の石辺を探り大きな鰻が取れることもあった。前日の夕方に仕掛けた「はいこみ」（(釣り糸細工）を朝早く引き上げに行って獲物を見るのも、津森の子どもたちの楽しみの一つであった。哲太郎の釣果は志賀家の貴重な食の足しにもなった。

友達の中には、女の子もいた。武家育ちの子で、哲太郎と同じ歳の林家の長女名茂(なも)という聡明な子は、哲太郎たちが楽しそうに川遊びに興じている様子を時々覗きに来ていた。哲太郎たちの魚釣りなどに興味を示し、友達となって仲間たちと一緒に遊ぶ時期もあった。名茂は、哲太郎の妹を可愛がってくれた。ある日、子どもたちは名茂の誘いで、林家の庭に遊びに行き、お菓子を貰ったことがあった。縁側から見る林家は、床の間に武家の家らしく鎧兜が据えられていた。家具調度も見るからに立派なものと感じられた。哲太郎の家とは比較にならない裕福な暮らしである。しかし、そのような暮らしを垣間見ても哲太郎は貧しさを気にすることもなく快活な少年として育っていった。

哲太郎の旺盛な好奇心、大人の話をよく聞き学ぼうとする意欲はずば抜けており、同年の子どもたちからは何かと頼りにされる存在となっていた。

哲太郎が幼い頃に遊びに行った林家の武家屋敷は、林家の子孫により大切に守られ、建築後百数十年を経た今日、熊本地震にも耐えて津森の地に残っている。

［二　少年期の教育　から］

哲太郎は、中村家の八代目当主中村傅兵衛に真面目な性格が気に入られ、家族同然に可愛がられた。傅兵衛は、縁側で片仮名・平仮名・漢字などの初歩的な手ほどきをしながら、哲太郎の物覚えの良さに感心した。

この頃の哲太郎は、周囲の温かい人情に、「ありがとうございます」と律儀にお礼を言うことが身に付いていた。これは母ジュカの厳しい躾のおかげであった。また、恩義と礼儀を大切にする性格は、哲太郎の初めての師となった傅兵衛による論語等の手ほどきの影響でもあった。後に台湾に渡ったあとも、彼は、傅兵衛に対する恩義を忘れず、傅兵衛亡きあとも中村家に度々便りを届け、珍しい産物を送った。

明治五（一八七二）年八月二日「一般の人民必ず邑に不学の家なく、家に不学の人なからしめんことを期す」として、『学制』が発布された。これはわが国の近代的な教育制度に関する初の法令であり、国民はすべて小学校に通わなければならないこととなった。

それまで学校は藩が建てたもので、熊本の「時習館」、宇土の「温知館」、八代の「伝習堂」、人吉の「教習館」などがあった。これらは「藩校」とよばれ、通学できる者は限られていた。農民や商人の子弟の大半は寺子屋、すなわち私塾に通い「読み書き、そろばん」を習ったのである。

津森には杉堂に「寒野塾」、小谷に「富永塾」があった。志賀家としては必ずしも塾に通わせる経済的な余裕はなかったが、傅兵衛の好意もあり、哲太郎(八歳)は木山の塾に通うことができた。ここで読み書き、そろばんを始め、孔子を祖とする儒教の教え「四書五経」の手ほどきを受けた。

［四　青年期の理想と挫折・渡台決意　から］

彼は漢学の素養深く、作文も得意であったので記者として重宝がられた。論陣をはる傍ら東京にも往き来し、政客との交わりを深め、各地の政情を調査し、これを記事にした。しかし、主たる仕事は選挙運動で、選挙情報を蒐集し書く立場にあったことは勿論である。彼の人柄の良さと学識の深さに同僚間の評判は良かった。新聞記者として記事を書く傍ら選挙運動に従事し東奔西走、席の温まる暇もなかった。忙しい中にあっても向学心は盛んで、明治二十四（一八九一）年二月から十二月まで京都オリエンタルホールで英語を学び、明治二十五（一八九二）年八月から同二十七年三月まで元控訴院判事深野達に従い法律学を研究した。

当時、熊本の政界は、古荘嘉門や佐々友房らの「国権党」と、山田武甫や嘉悦氏房らの「改進党」の二大政党があったが、政党間の対立が激しく、選挙や集会で刀剣等を持ち込み大乱闘を起こし、死傷者が出ることもしばしばで、警察が出動する事件が次々と発生していた。

そのような状況の中で、哲太郎は国権党員であるが故にやむなく選挙の争に加わっていたのであるが、その実状が余りにも醜悪なことに嫌気がさし、明治二十七（一八九四）年、二十九歳の時、九州日日新聞を辞し、翌二十八年、国権党からも離党し、政界と一切の縁を切った。

政争と決別した後は、かねて神水義塾で学んだ仏教書に親しみ、自分の進む道は如何にあるべきかを熟考した。

明治二十三(一八九〇)年十月三十日に発表された教育勅語は、「広く全ての人に慈愛の手を差し伸べましょう」「友だちはお互いに信じ合いましょう」などの十二の徳が示され、のちに修身となっていく。この十二の指標は哲太郎の思いに通じており、彼は教育者になることを決心した。これは、彼の人生における一大転換であった。

その後、小学校の訓導に職を求め、菊池郡原水尋常高等小学校に就職した。しかし、型にはまりすぎた教育方法に失望し、勧める人があって、大原義塾(菊陽町)の塾頭に転じたが、ここも彼の意に叶わず、苦悩の末に辞することとなる。

この頃日清戦争が終わり、下関条約で台湾が日本に割譲されたので、新天地台湾の子弟教育に力を尽くそうと思い、かねて宮崎滔天より鼓吹された孫文の三民主義(民族・民生・民権主義)を実践する好機が到来したと考え、渡台を決意した。

［七　台北時代　から］

哲太郎の渡台目的は台湾子弟の教育にあり、その初志を遂げようとの熱意に燃えたが、まだまだ教育制度も定まらず、すぐには職を得ることが出来なかった。当面の凌ぎとして新起街の一角に恰好な空家を見つけ、改造して酒店を開店した。酒の小売もすれば、腰かけて一杯飲ませるという酒店である。

哲太郎の新起街の酒店は開拓景気に乗り、場所も良かったので一時は繁盛したが、哲太郎自身は政客・教員上がりで、算盤勘定に疎く、人がいいので売掛金の催促もできず、おまけに本人が酒好きときているので、客と一緒に酒を呑んでは議論を戦わせるという具合で、店は繁盛すれども集金できず、仕入れに不自由する状態になり、翌三十年暮れにはどうにもやり繰りがつかず閉店となった。

［十　文昌廟時代　から］

公学校は、前年国語伝習所を改称したばかりで、生徒は四十余人。四学年制の当時で、本堂前に一学級、両側に一学級ずつと三学級の複式授業であった。先生は、校長金子政吉(茨城県那阿郡大賀出身。後に立派な教育者として記念碑が建てられた)と台湾人の汪清水、哲太郎の三人だったが、同八月に陳藻芬が加わった。

金子校長と哲太郎はお互いに尊敬の気持ちで接した。生徒たちもよくなついていた。金子校長は、哲太郎と同じく、折あるごとに和服を着ていた。哲太郎が、「金子校長の着物は上等だから、普段から着られんですな。」と言うと、金子校長は、「いや私は、志賀先生とは違って無精者ですから。」 と言って笑った。

学科は、修身、国語、作文、算術、習字、体操、唱歌の七科目であった。哲太郎は唱歌と体育が不得手で汪先生が受け持ったが、その他の各科目は熱心に、分かり易く生徒に教えた。開校当時は石板に石筆の時代で、後に鉛筆に代わった。

習字は得意で、習字の時間には皆に道具を用意させた後、紙や筆や墨のない子を調べ、その人数を数えて机の引き出しから必要な数のものを出し、生徒に取りに来させた。全部に行き渡ってから黒板に書き方を説明し、生徒が書き始めると教え子の手を握って手助けしたりした。台湾の子弟にとっては、先生の鼻息が頭の上から吹き下ろされ、温かく抱かれるような感じで、数十年たった後でも「今でも懐かしい」と教え子たちは目を潤ませて語った。

体操は不得手だったようで、着物と袴と草履の姿で、中折帽は冠らず、笛を吹いて整列させ番号をかけさせた後、校庭の中央でフットボールを高く蹴り上げる。その後は生徒たちが自主的にボールを蹴り回して遊ぶのを楽しそうに見ていた。暫らく走り回った後は、木陰で哲太郎を囲むように座り、彼自身の子供の頃の勉強のこと、山や川で遊んだ時のこと、日本の風習など、いろんな話をする。このように体操の時間は徳育の時間にもなった。生徒にとっては、この様な体操の時間が最も楽しい時間であった。

◇

当時、台湾住民は、日本警察官の一方的な取締りや役人の厳しい税の取立てに困っていた。法律に弱く官憲に抵抗できない住民等は、よく哲太郎のところに来ては、その苦衷を訴えた。哲太郎は彼等の代弁者となり、警察や弁務署に行き街民の要望を叶えた。

これについては面白い例がある。休日には、朝から子どもたちが哲太郎の宿舎に来て、「先生釣りに行きましょう」と誘う。哲太郎は、小さい頃、津森の木山川でよく釣りをした経験を活かし、子どもたちに釣りのコツを教えた。これにより魚がよく釣れるようになった子どもたちは「先生は釣りの名人だ」とはやし立てた。気を良くした哲太郎は、もっと釣れるようにと、山から孟宗竹のような太い竹を切りだし、筏を作った。そして、川岸から川の深い所までこぎ出して釣ると、思った以上によく釣れた。このことが子どもたちや街民たちにも評判になり、それぞれ簡単な筏を作って釣りを始めた。川岸から釣るのとでは雲泥の差があった。それを見ていた警察官が、この状況を大甲支庁に通報したため、行政から筏に課税するとの通知がなされた。そのため、楽しみにしていた筏釣りが出来な

くなり、子どもたちは哲太郎に訴えた。彼は、直ぐに大甲支庁に赴き、かって熊本で記者、そして政治活動で鍛えた弁舌で官史に対し課税を止めるよう訴えた。今は一代用教員の身ではあるが、内地では時めく安達閣下の友人であり、家永署長の推薦ということを薄々知っていたのか、哲太郎の言うことはそう無下にも斥けることはしなかったようで、課税は間もなく撤回された。このように哲太郎は、街民のよき指導者であり、相談相手でもあった。

［十一　三堡校舎時代　から］

公学校の生徒は、文昌廟時代より段々多くなり、二百～三百名と増え、先生達も増え、金子校長の下に日本人教師十名、台湾人教師が十名程になった。大抵は哲太郎の教え子で、台中や台北の師範学校を出た者であった。哲太郎の宿舎は先生達の宿舎の端にあり、畳敷き三間と台所があった。物価は安く、暮らしは楽で、哲太郎の俸給も次第に上がり、六十円ほど支給され、他の雇い教師の倍ほども有り、正規教師を凌ぎ校長に次いで高給であった。

台中県は、台湾経済の中心地であり、台湾における熊本県人は台中居住が最も多かった。台中の熊本県人の中でも志賀哲太郎の名前は広く知れ渡っていた。

ある日、熊本県出身の詩人が訪ねてきた。彼は、詩書を学ぶために台湾に渡ってきたもので、知人から哲太郎のことを聞いていた。台湾に着くとすぐに同郷である哲太郎の宿舎を訪ねたのである。

突然の来客であったが、ソデは状況を察し直ぐに買い出しに行き、夕食の準備をした。そこに丁度、大甲公学校の校医上野齋が来た。熊本出身の飲み友達である。来る時は、必ず酒徳利を下げてくる。上野は、大甲街の開業医でもある。生徒に人気があり、大甲の住民にも尊敬される医師である。その夜は三人で酒を酌み交わし、久し振りの熊本弁で大いに盛り上がった。

話の中で、彼が東京にいる時、宮崎滔天に会ったこと、徳富蘇峰が桂内閣擁護の論陣を張り、焼き打ちを受けたことなどが話題に上がった。また、東京には熊本県人がよく泊まる宿屋があり、その宿屋の女将の話で盛り上がった。哲太郎は記者の頃、何度か世話になっている。その宿屋の女将の名は金森名茂と言い、津森村小谷にある林家の娘である。武家の林七郎と矢嶋家の六女勝子が結婚し、長男治定・長女名茂・二女達子が生まれたが、故あって離婚した。長男治定と長女名茂について、哲太郎は、「林家のお名茂さんは、わしと同じ歳だった。お侍の林七郎さんの娘で蘇峰さんの従妹たい。その兄さんの治定さんは、蘇峰さんと同じ熊本洋学校に行っていた。林家では、何度か珍しい美味いお菓子をもらったりお世話になったものだ。」と、久しく帰省していない故郷について懐かしそうに話した。

◇

一九二四（大正十三）年、哲太郎の勤続二十五周年祝賀会が誰からともなく自然に発議され準備が整えられて、同年十二月二十一日に大甲公学校講堂において盛大に挙行された。今度は何の干渉もなく、哲太郎もこれが一世一代の誉れと考えて、喜んで出席した。参加者は、当時の州知事、警察署長、街長、校長、公医、街の有力者等の外、島内から馳せ参じた教え子たち三百余名に上った。加藤台中州知事らの来賓挨拶のあと、哲太郎は羽織袴の正装でゆっくりと壇上に上った。彼はうつむくような格好で、ゆっくりと答辞を述べ始めた。

「私の一生の中でこんなに感激したことはありません。特に、教師として自分の我がままな信条を、生徒たち、そして教え子、ご家族の皆さまに率直に受け入れて頂き、却って励ましを頂きました。この励ましにより私志賀は二十五年という教育人生をゆるぎなく辿ることが出来ました。感謝すべきことは、私に教師として生きる場を与えて頂き、そして皆さまの励ましにより活かされたことにあります。これほど有難く幸せに感じたことはありません。・・・」と涙を浮かべながら感謝の挨拶を述べた。

実は、この祝賀会が行なわれる二か月ほど前に大甲公学校高等科の生徒が、日本人教師を故意に怒らせた上に、言い争いに発展した事件があった。激怒した教師は校長へ直訴し、学校側は学生を除名処分にする会議を開いた。そのことを聞いた保護者が、哲太郎に救いを求めてきたので、彼は「台湾では学生を募集するのが容易ではないのに、なぜ即座に学生を退学処分にするのか？」と校長に掛け

合ったが聞き入れられなかった。さらに日本人教師の中に、「学校には優秀な教員の存在が重要であるのに、志賀のように正式な教員でない者がいては、将来学生たちが、学校側は教育を重視していなかったというであろう」と主張する者もおり、校長はそのような意見を理由に哲太郎を学生農場の管理に異動させたのである。彼は異動に対して異を唱えたが、聞き入れられなかった。

生徒に教えられない立場になったことは哲太郎にとって大きな打撃であった。このような状況のとき勤続二十五周年の祝賀会が行なわれたのである。

哲太郎にはこれまで和服で教壇に立ち続け、一人の人間として教え子に向かい合ってきたという自負があった。しかし、現在の台湾情勢を考えたとき、生徒・教え子たちを前にして、彼らとの師弟愛が深ければ深い程、哲太郎の懊悩も大きかったのである。それから一週間後、哲太郎が自決するようなことが起ころうとは参会者の誰一人として予想だにしなかったであろう。答辞を終えて気持ちの高揚が治まったその時、哲太郎は、この祝賀をもって、自らの死出の花道にと考えたのではなかろうか。

［**十三　自決と葬儀**　から］

一九二四（大正十三）年十二月二十九日、公学校は冬休み前の終業日であった。哲太郎はいつものように四時に起き、羽織袴の正装で、渡台以来、世話を受けたソデにはすまないと思いつつも「出掛けてくる」と言葉少なに言って、大甲渓に近い小丘にある游水池へ向かった。

游水池の堤に立ち、故郷の方向に向かって手を合わせた哲太郎は、死を前に何を思ったのだろうか。総督府と教え子の対立による懊悩(おうのう)だけではなく、心の底には、故郷津森で受けた恩義を、日本統治下の台湾で返し得たという満足感もあったのではなかろうか。哲太郎はそこに少なからず自らの救いと幸せを感じ、教え子たちとの二十六年間の思い出が走馬灯のように彼の脳裏を駆け抜けたであろう。哲太郎は下駄を揃え、静かに遊水池の冷たい水にわが身を委ねた。およそ十五キロの大石を身体にくくりつけての覚悟の自殺であった。

◇

死して骨を台湾に埋めんと、初めから決めていたのである。葬送の方法も、台湾式を指定した。台湾式と遺言しないと日本式とされる恐れがあったからと思われる。

教え子と生徒たちは大甲公学校の校庭で、哲太郎の葬儀に参加し、霊柩に随行して鉄砧山麓の墓地に送った。この墓地は、教え子で後大甲鎮(市)長、大甲鎮瀾宮管理委員会主任委員(大甲媽祖廟総代)の郭金焜が寄贈した百余坪の墓域で、哲太郎がかねて死んだらここにと希望していたところである。

葬列は公学校の校庭を出て、媽祖廟の前を経由して、北へ向かって進んだ。葬送の沿路の商店や民家は、皆門前の路傍に机を出し供物を並べ、線香を立て、金銀紙を焼き、爆竹を鳴らして礼拝し、涙を流して大甲の聖人を見送った。道行く人も立ち止まって黙祷し、むせび泣いた。

台湾では路傍に机を出して、供物を並べ、線香を立てて礼拝することを香路祭あるいは置香祭と称し、神さまの御興行列に限られた敬意の表示である。今回の哲太郎個人に対する香路祭は大甲始まって以来の空前絶後のことであった。

葬送の列は延々一キロメートルに達した。当時の大甲の人口は三千人であり、街を挙げて「大甲の聖人」を弔ったということになる。

呉淮水が位牌を捧げて先頭に立ち、教え子八人が霊柩を担ぎ、東北三公里の鉄砧山麓まで運び、用意されていた墓域に埋葬した。風光明媚な鉄砧山に葬られ、教え子の心からの礼拝を受けられる哲太郎は、死して幸せと言うべきであろう。

※　詳細については、別途刊行の「志賀哲太郎小傳」をお読み頂くようお願いしたい。

■ 資料で辿る志賀哲太郎の生涯

本会アドバイザー　**増田隆策**　　（郷土歴史研究家・元山都警察署長）

志賀哲太郎先生の研究を始めて数年、文化的課題について調査・研究を行うのは初めてで戸惑うことも多々ありましたが、先生の人格的な魅力に惹かれて資料の掘り起こしに夢中になりました。

先生は、青年期に九州日日新聞（熊本日日新聞の前身）の記者として活躍されながら、紫溟会会員、国権党員として往時の錚々たる人々と交わり、健筆を振るったと思われます。

しかし、先生が直接書かれたものは葉書１枚を除いて発見できず、資料のほとんどは、戸籍、過去帳、遺族が保有されている僅かな遺品、教え子の回顧談をもとに書かれた台湾の郷土史家の著述や台湾大甲区公所の広報誌等で、あとは、それらの資料を足掛かりにしてインターネットの情報を渉猟して掘り出したものです。

それでも、生誕から没後の顕彰事績に至るまで、50 余りの項目に分けてまとめることができるほどの資料が集りました。

これらは、いずれ、先生の研究に資することができるように再度整理したいと考えていますが、当面、多くの人の学習の便に供するため 30 項目ほどに整理し、さらに、一般的な理解に役立てるため 20 項目ほどにまとめ上げました。

取り敢えず、これらに目を通していただければ、先生のご事績は、ある程度把握できるのではないかと思います。

今後、先生が直接書き残されたものを捜し出すことが最大の課題ですが、熊本日日新聞社、台湾台中市の歴史資料関係部署、日本及び台湾の大学等の研究機関等に協力を求めていきたいと思います。

今回は、18 項目にまとめた次の資料を辿って頂ければと思います。

（資料一覧）

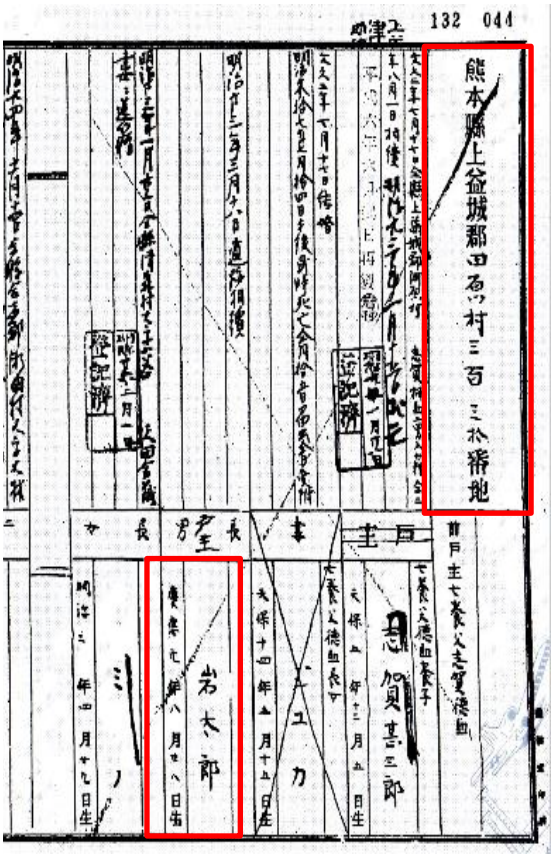
１　益城町田原で生まれる
２　神水義塾で学び、明治法律学校へ進学
３　国権党の記者として活躍
４　教職の道へ
５　渡台を決意
６　土匪の襲撃とマラリア
７　雇教員として採用される
８　文昌祠の大甲公学校
９　教育の重要性を説いて回る
10　貧困家庭生徒への学費支援
11　三堡の大甲公学校
12　金子校長辞職の衝撃
13　新校長との軋轢
14　任官を拒否
15　総督府と卒業生の狭間での苦悩と教職の解雇
16　入水自殺
17　葬儀
18　文昌祠入りと清明節

1　益城町田原で生まれる

哲太郎が釣りや水遊びをした木山川

手前の畑が生家跡（右の建物奥が中村傳兵衛宅跡）

生家跡の石垣（正面）



戸籍の写し（澤田寛旨氏提供）

哲太郎は、慶応元（1865）年８月28日上益城郡田原村（現益城町田原）330番地で鍛冶屋の志賀甚三郎の長男として生まれました。幼名は岩太郎。幼少期は、近くの木山川で釣りや水遊びに興じました。哲太郎は、中村家の八代当主傳兵衛（でんべえ）に気に入られ、家族同然に可愛がられました。傳兵衛は、縁側で仮名・漢字などの手ほどきをしながら、哲太郎の物覚えの良さに感心し、木山の塾を勧めました。木山の塾では読み書き・そろばんを習い、塾が休みの時は、家の手伝いを済ませ、中村家に行って四書五経の本が納められている書籍箱から前回習った本を取り出して読みました。母ジュカは哲太郎の向学心を見てとり、一鍛冶屋の倅(せがれ)として終わらせるべきではないと思うようになり、経済的に苦しくはありましたが、塾に通わせ続けました。

2　神水義塾で学び、明治法律学校へ進学

旧明大記念堂

明治法律学校長
岸本辰雄

国際法教師
ボアソナード

明治大学発祥の地（有楽町）

民法教師
大木喬任

刑法教師
鶴田　皓

商法教師
箕作麟祥

哲太郎は、18 歳のときに神水村（現熊本市中央区神水本町）の神水義塾に通い、中西牛郎(号 蘇山)から四書五経、陽明学と英語を学び、八淵蟠竜（やつぶちばんりゅう）から仏教を学びました。

その後、明治 20（1887）年２月、21 歳で上京し、 神田南甲賀町（現千代田区神田駿河台１丁目）の明治法律学校（現明治大学）に進学しました。同校では家からの仕送りも乏しく食費を削って法律書を購入し、勉強しています。当時の校長は創設者の岸本辰雄で、教師がフランス法学者国際法のボアソナードや民法の大木喬任（おおきたかとう）らでした。

哲太郎は、同 23(1890)年３月、父甚三郎が亡くなったため、志半ばにして学業を断念し、帰郷しました。

3　国権党の記者として活躍

九州日日新聞記者
安達謙蔵
国権党

荒尾村　革命家
宮崎滔天
民権党

熊本市街地図：明治 30 年頃

海軍嘱託諜報
ジャーナリスト
宗方小太郎
国権党

哲太郎、東京・京都に出現

宗方小太郎日記」から

明治26年5月東京の宗方を訪問

五月初三日

雨天。朝佐藤帰る。志賀哲太郎来談。西京井手三郎に復信す。上海白岩龍平の信至る。白岩は研究所の困難を救ふ為め市川徹弥と共に大坂に帰る筈なりと云ふ。又た熊本緒方二三，前田彪より来信。夜緒方，山田に発信，東京運動の概略を報ず。

五月初四日

晴。朝中西，荒賀，宮内，中川義弥，志賀来談。下午中西と荒賀の処に至り談ず。夜炸醤麺を作り食ふ。味頗る美。十時帰る。亀雄来談。家大人の書あり。

五月初五日

晴天，風大。午前中西来り，午後去る。井手京都より来信。品川子京都にて都合悪しと云ふ。古城，志賀来談。中川義来り宿す。井手三郎に復信す。

明治26年6月京都から宗方へ書簡

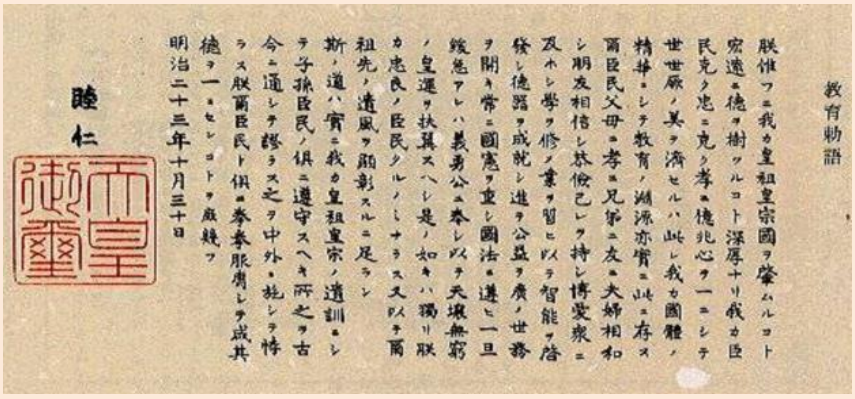
六月十日

雨天。天津仲正一（陸軍大尉小沢徳平也），芝罘白須直に寄するの書を作り，中西正樹の天津行に托す。午前出て河野を訪ひ，晌午帰る。別府氏留守中に来訪せりと云ふ。下午河野と古城貞吉を訪ひ，三時帰る。夜鳥居来談。是日家大人の書及び菅婦人，京都志賀哲太郎の書到る。

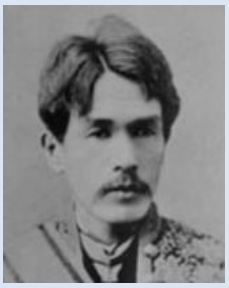
哲太郎は、明治 23(1890)年佐々友房や古荘嘉門(ふるしょうかもん)らを中心に結成されていた「紫溟会」（しめいかい）に入会し国権党員となり、九州日日新聞（明治 21 年創設）の記者として採用されました。この頃、安達謙蔵（あだちけんぞう）や宮崎滔天（みやざきとうてん）らとの交流が生まれました。東京～熊本を往来し、政客との交わりを深め、各地の政情をも調査し記事にしました。哲太郎の東奔西走の状況は、国権党で海軍嘱託諜報員であった宗方小太郎の日記にも記録があり、東京や京都でも活動していたことがわかります。

4　教職の道へ

明治天皇



教育者の道に進むきっかけとなった「教育ニ関スル勅語」（明治 23 年）



教育勅語起草者
内閣法制局長官　　儒学者
井上毅（熊本県）　**元田　永孚**（熊本

志賀哲太郎

儒教・仏教等の素養

京都オリエンタルホールで英語を学ぶ

元判事深野達に従い法律を学ぶ

修身・道徳教育の規範

台湾教育令

原水小学校跡・大原義塾跡（菊陽町南方公園）

明治 23(1890)年 10 月熊本県出身の井上毅（いのうえこわし）と元田永孚（もとだながざね）が起草し明治天皇によって「教育ニ関スル勅語」が発布されます。これが哲太郎を教育者としての道に進ませるきっかけとなります。哲太郎は教師になるため記者をしながら明治 24(1891)年 2 月から京都オリエンタルホールで英語を学び、明治 25(1892)年 8 月から元控訴院判事深野達に従い法律学を勉強しました。そして政界と決別するや原水小学校の訓導(くんどう)となります。しかし、彼の意を伸ばすには余りにも型にはまりすぎでした。勧める人があって、大原義塾の塾頭に転じましたが、ここも彼の意に叶わず、苦悩の末に辞めます。

5　渡台を決意

台湾割譲

内閣総理大臣
伊藤博文

全権大臣
李鴻章

日清講和条約（明治 28 年 4 月）

抗日ゲリラ

義勇軍**丘逢甲**

義勇軍**陳季同**

抵抗

鎮圧

初代総督
樺山資紀

総督府学務部長
伊沢修二

教育重視

6人の学務官（後列右端が平井数馬）

三民主義を
唱えた**孫文**

支援

宮崎滔天

台湾子弟の教育

芝山厳学堂に通う台湾人生徒

遭難

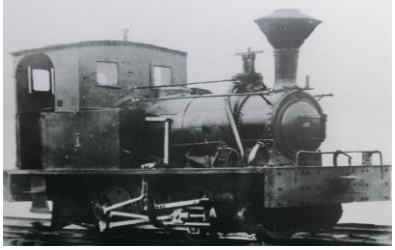
学務官僚遭難之碑（台北市）

総督府は教育の重要性から
各所に国語伝習所を開設

哲太郎は渡台を決意

日清戦争の結果、1895（明治 28）年４月日清講和条約で台湾が日本に割譲されます。台湾総督府は割譲反対の丘逢甲らの義勇軍を鎮圧して台湾全土を制圧します。制圧と同時に総督府学務部長伊沢修二は「教育こそ最優先すべきである」と提唱し、台北に「芝山厳学堂（しざんがんがくどう）」を設立して熊本県出身の平井数馬ら６名の学務官を派遣しました。学務官は台湾人生徒と同じ部屋で寝泊りし、食事も共にして日本語教育だけでなく、日本の礼儀作法を教えました。しかし、芝山厳学堂は 1896（明治 29）年元旦、抗日ゲリラの襲撃を受け、学務官は全員殉職しました。総督府は、同年、教育の重要性から台北に「国語学校」を設け、全島の各所に「国語伝習所」を開設しました。哲太郎は、台湾の教育情勢を聞き、台湾の子弟教育に尽くそうと思い、かねて宮崎滔天より鼓吹された孫文の三民主義（民族・民生・民権主義）を実践する好機が到来したと考え、台湾へ渡ることを決意したのです。

6 土匪の襲撃とマラリア

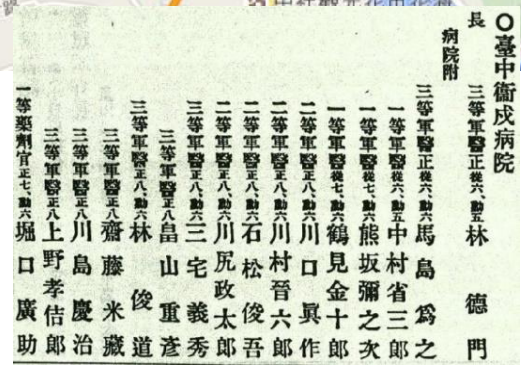


哲太郎が新竹まで乗車した騰雲号
（「台湾鉄道の蒸気機関車について」引用）

土匪の襲撃を受けた伯公坑
明治 37 年撮影（苗栗老照片引用）

伯公坑停車場　撮影不明
（「苗栗老照片」引用）

哲太郎が入院した鎮瀾宮　昭和 11(1936)年撮影
（「大甲鎮志」引用）

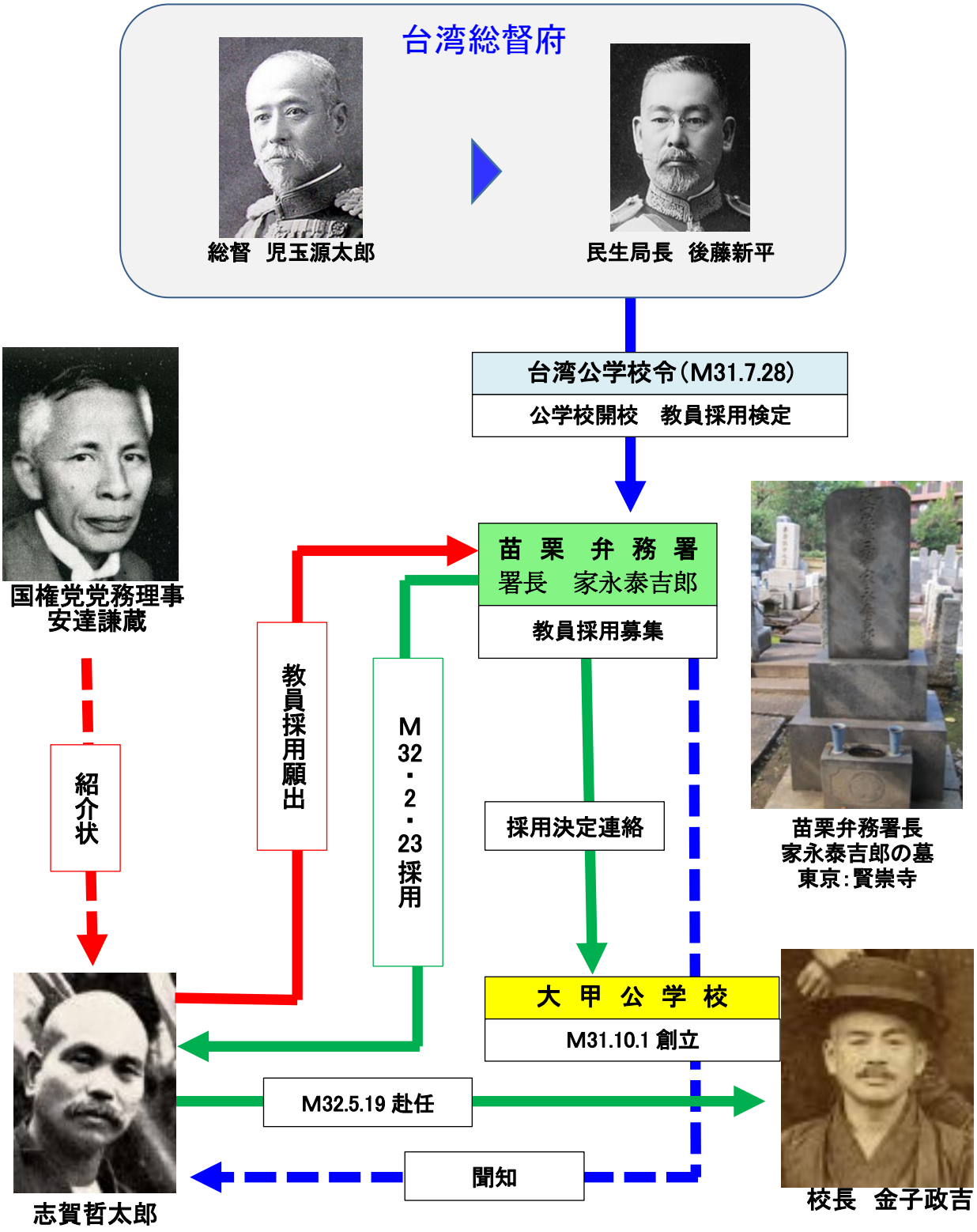


○臺中衛戍病院
長　三等軍醫正従六、勲五　林　德門
病院附
三等軍醫正従六、勲六　馬島爲之
一等軍醫従六、勲五　中村省三郎
一等軍醫従七、勲六　熊坂彌之次
一等軍醫従七、勲六　鶴見金十郎
二等軍醫正八、勲六　川口眞作
二等軍醫正八、勲六　川村晉六郎
二等軍醫正八、勲六　石松俊吾
二等軍醫正八、勲六　川尻政太郎
三等軍醫正八、勲六　三宅義秀
三等軍醫正八、勲六　畠山重彦
三等軍醫正八、勲六　林　俊道
三等軍醫正八　齋藤米藏
三等軍醫正八　川島慶治
三等軍醫正八　上野孝佶郎
一等藥劑官正七、勲六　堀口廣助

陸軍台中衛戍病院医師
（「総督府職員録」引用）

哲太郎は、酒店閉店後、新たな職を求めて熊本県人が多く住むという台中に向いました。新竹まで汽車で、そこから徒歩で台中の当時縦貫鉄道の終点であった北部山中の伯公坑（伯岡坑）に住居を求め、建設中の台湾縦貫鉄道工事の御用達商として生計を立てることになりました。ここで女中として熊本県河内村出身の島村袖(しまむらそで)を雇いました。ある夜、土匪（どひ）の襲撃に遭い財物は取られ、危うく命を落とすところでしたが、袖の機転により助かりました。しかし、マラリヤに罹（かか）り危篤（きとく）に瀕し、担ぎ込まれたのが大甲の媽祖廟（ばそびょう）である鎮瀾宮（ちんらんぐう）の陸軍衛戍（えいじゅ）病院でした。九死に一生を得た哲太郎は袖の看病を受け鎮瀾宮で療養につとめたのです。

7　雇教員として採用される



哲太郎は、明治 31（1898）年に公学校が開設されたことを機に、教育者に戻ることを決意しました。病が良くなると、いざという時に役立てようと貰っていた国権党党務理事・安達謙蔵の紹介状を持って、苗栗弁務署長・家永泰吉郎に面会し、教員採用を願い出ました。家永署長は、安達先生の紹介でもあり、哲太郎の学識、人柄にも問題はありませんでしたので「苗栗弁務署雇員」の資格で採用し、開校したばかりの大甲公学校への配属を命じました。

8　文昌祠の大甲公学校

運動場(「大甲鎮志」引用)

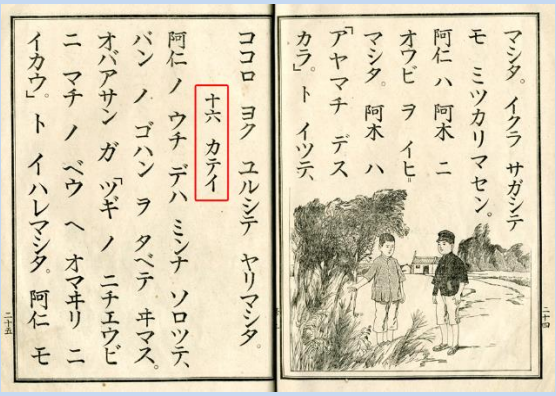
職員室

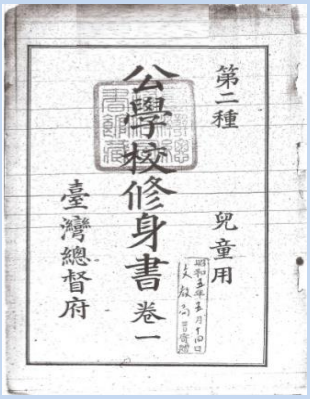
教室

校　長
金子政吉
茨城県

雇教員
志賀哲太郎
熊本県

雇教員
陳藻芬
台湾

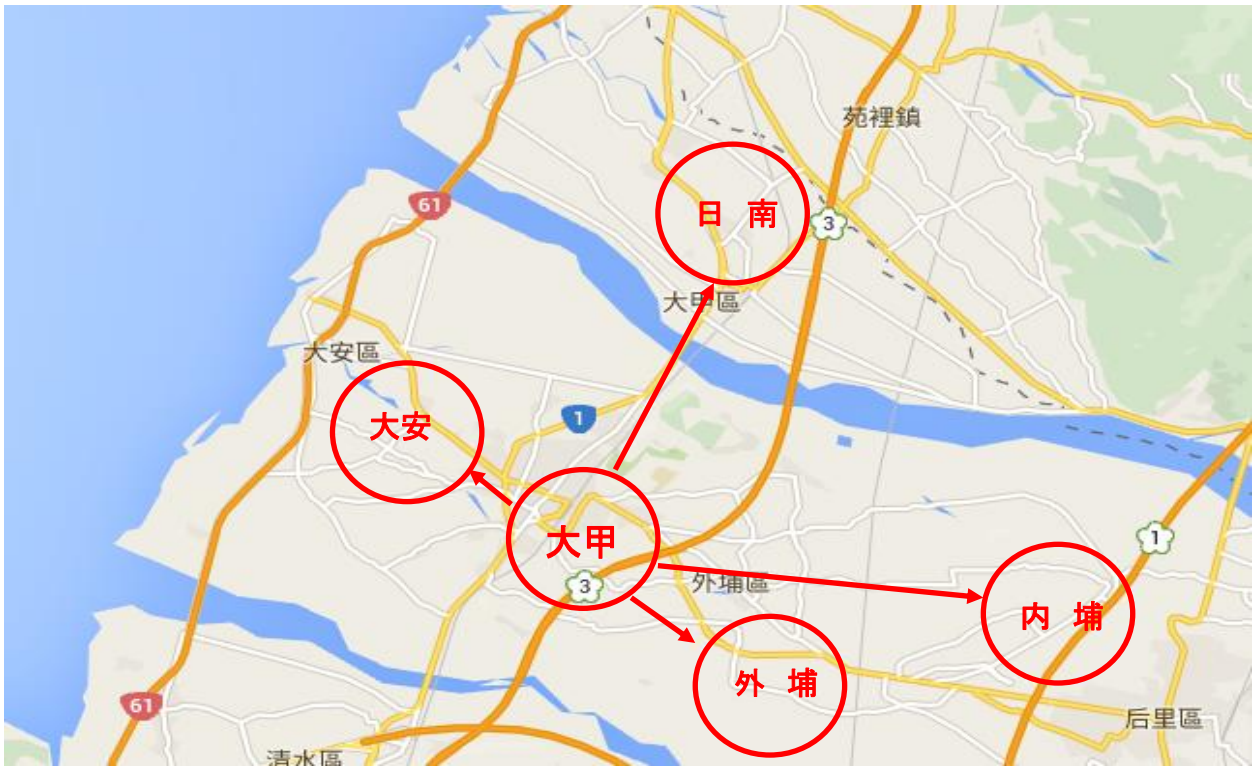




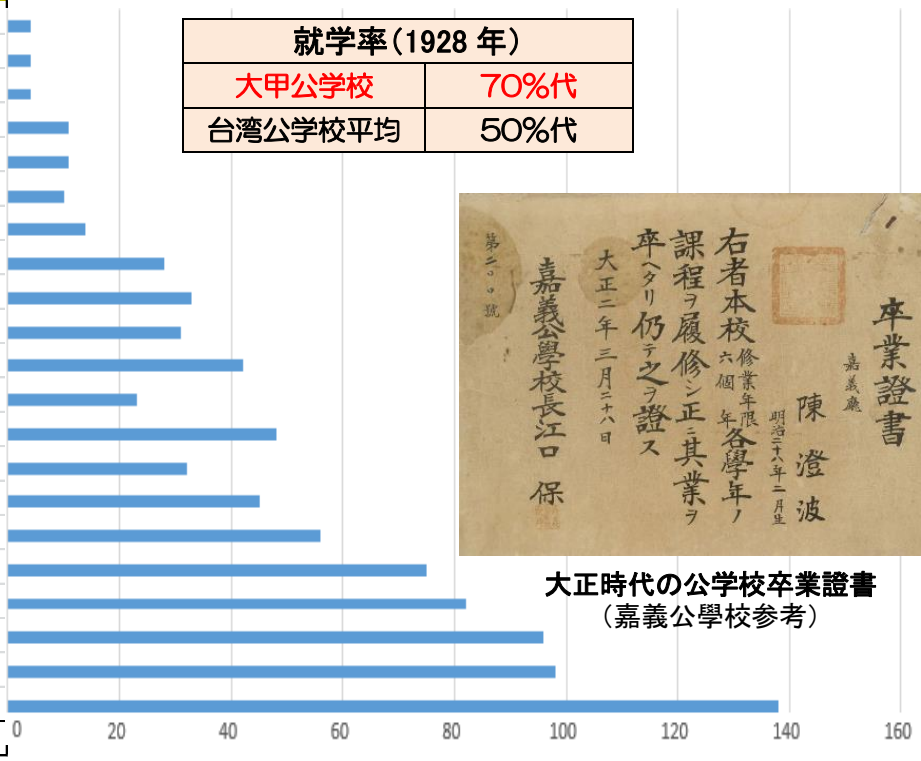
国語と修身の教科書(「臺灣總督府學務部」引用

大甲公学校は、明治 31(1898)年 10 月に文昌祠にあった国語伝習所を廃止した後にできました。哲太郎は翌 32 年２月、陳間(チンカン)に従い台湾語の研修を受け、同年５月から教鞭（きょうべん）をとります。生徒は 40 余人でした。開校当初の修学年限は四学年制で、８歳以上 14 歳以下の子どもたちでした。二学期制で一学期は２月１日から７月 31 日まで、二学期は８月１日から翌年１月 31 日までででした。本堂前に一学級、両側に一学級ずつと三つの学級を置いた複式の授業でスタートしました。先生は、校長金子政吉、台湾人の汪清水（オウセイスイ）と哲太郎の３人で、哲太郎は不得手の唱歌以外の修身（しゅうしん）、国語、作文、算術、習字、体操を受け持ちました。同年８月からは雇教員の陳藻芬（チンソウブン）が加わりました。

9　教育の重要性を説いて回る



年	人
M37	4
M38	4
M39	4
M40	11
M41	11
M42	10
M43	14
M44	28
T1	33
T2	31
T3	42
T4	23
T5	48
T6	32
T7	45
T8	56
T9	75
T10	82
T11	96
T12	98
T13	138
計	885



就学率（1928 年）	
大甲公学校	70%代
台湾公学校平均	50%代

大正時代の公学校卒業證書
（嘉義公學校参考）

台湾では、当時、就学率が極めて低く教育に対する保護者の理解がありませんでした。そのため開校して数年は卒業生は 10 人前後でした。哲太郎は、これを打開するため、明治 33(1900)年から毎週日曜日に手弁当で大安、日南、外埔、内埔（片道約 10km）まで足を伸ばし、学齢期の子供の居る家や入学しても休んでいる子供の家を一軒一軒訪ね、教育の尊さを説いて回わりました。この地道な努力により就学児童もだんだんと増えていき、大正 13(1924)年には 138 名の卒業生を出すに至りました。昭和３（1928）年の大甲公学校創立 30 周年祝典時に残された文章に「日本内地の就学率は 97～99%、台湾は 50%代、大甲地方は 70%代とあり、哲太郎の努力の跡を裏付けています。

10　貧困家庭生徒への学費支援

大甲公学校の授業風景　昭和 15 年(1940)撮影
「大甲鎮志（提供呉永芳）」引用

哲太郎

学費支援

貧困家庭生徒
約 300 人

石墨と石板（参考例）

最初の国産鉛筆

哲太郎は書道にすぐれており、書道の授業も受け持っていました。多くの生徒が毛筆や習字紙、硯、墨を買うお金がないことを知るや、哲太郎は「材料はすべて自分が用意する」と宣言し、生徒たちを学び舎に呼び戻しました。また、ある時一人の生徒が足に釘が刺さり赤く腫れあがり授業に出て来れないと聞くと、すぐさま生徒の家に行き、その生徒を背負って登校したのです。もし家が貧しくて勉学を続けられない生徒がいれば、すぐさま学費を提供しました。支援を受けた生徒は開校以来 25 年間で 300 人以上に及びます。

哲太郎は家庭訪問時には必ず文房具(石筆時代は石筆、鉛筆時代は鉛筆）を携帯し、生徒に贈ったと言います。毎月の給料の大半を生徒のために充てました。

11　三堡の大甲公学校

新校舎支援
大甲街長
朱麗

校長
教諭
金子政吉

訓導
陳嘉瑜
（教え子）

雇
志賀哲太郎

雇
黄並傳
（教え子）

① 正門
② 教室
③ 教員事務室
④ 講堂
⑤ 運動場
⑥ 哲太郎の宿舎
⑦ 鎮瀾宮

正門　昭和2(1927)年撮影

国旗掲揚台　昭和2(1927)年撮影

校内の大樹　昭和8(1933)年撮影

運動場　昭和2(1927)年撮影

三堡の新校舎は、大甲街長朱麗の支援で明治 43（1910）年に文昌校の南約 200 メートルの所に完成しました。広さは 3000 坪で宿舎を含む７棟の校舎があり、生徒 200～300 人に対応できる広さでした。生徒が増えたことから、教師も 20 人程度までになり、教え子の陳嘉瑜は哲太郎より上位の訓導でした。

12　金子校長辞職の衝撃

金子先生記念碑建立　昭和 14(1939)年 12 月

台湾人子弟

覗き込む

文昌祠日本人小学校分教場

日本人小学校　小島主任

大正2年
訴え

台　中　庁

監督不行き届きで
停職処分

校長　金子政吉

校長辞職
大正 3(1914)年 3 月 31 日

留任運動

大甲公学校

衝撃

衝撃

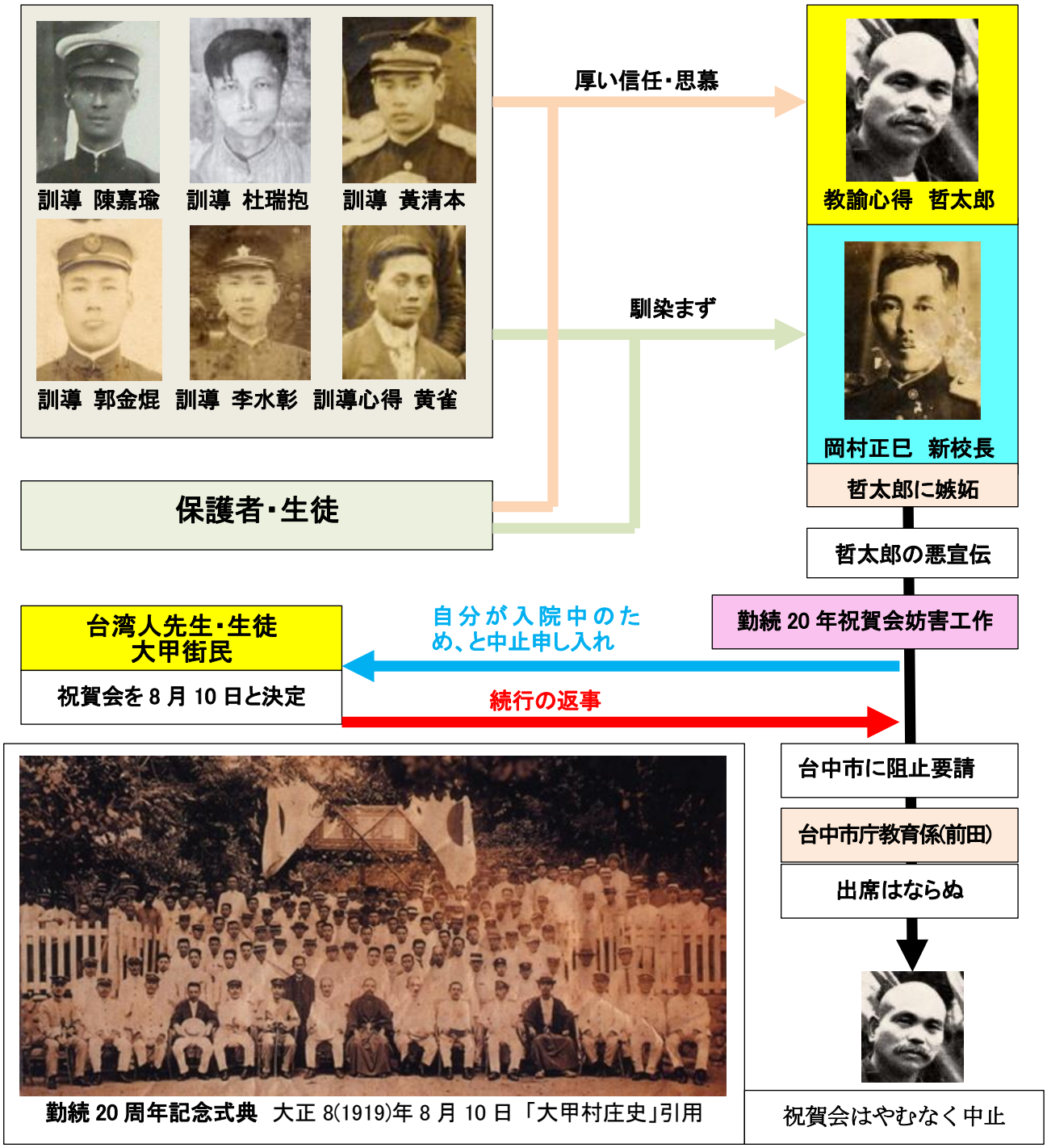
大甲街民

金子校長死亡
昭和 13(1938)年 12 月 30 日

金子先生教育会表彰祝賀
昭和2(1927)年

金子校長と哲太郎はお互いに尊敬しあい、生徒たちもよくなつき、学業の成績もぐんぐん上がっていきました。保護者からの招待にも快く応じ相談に乗っていたことは、着任以来一貫した行動でした。文昌祠の公学校跡は、日本人小学校の分教場になっていましたが、台湾人子弟は昔の事が忘れられず、文昌祠に行っては、教室を覗いたり庭で遊んだりしていました。それが日本人小学校の授業の邪魔をするということで、分教場の小島主任が台中庁に訴えましたので、金子校長の監督不行き届きという事になり、大正 2(1913)年に校長は停職となりました。金子校長が台湾人と仲が良すぎると密告した者がいたことも影響していたようです。全校挙げて留任運動が起こりましたが、校長は辞任となり、このことは哲太郎をはじめ街の人に大きな衝撃を与えました。金子校長は昭和 13(1938)年 12 月 30 日脳溢血で亡くなり、翌年教え子によって記念碑が建てられました。享年 55 歳でした。（茨城県出身）

13　新校長との軋轢(あつれき)



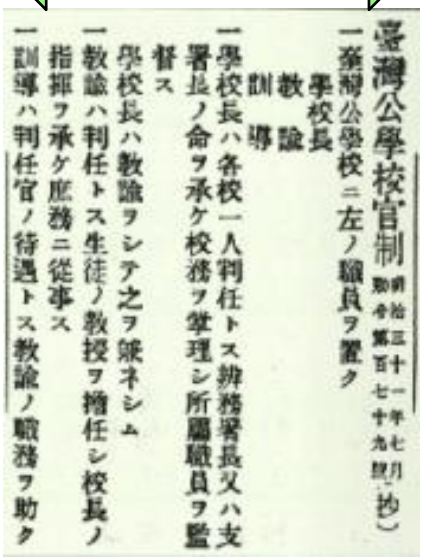
勤続 20 周年記念式典　大正 8(1919)年 8 月 10 日「大甲村庄史」引用

後任の校長は、哲太郎が教員たちの厚い信任と生徒たちの思慕(しぼ）を受けていることに嫉妬（しっと）し、自分の自慢や哲太郎の悪宣伝など陰湿な方法で事ごとに嫌がらせを行いましたが、哲太郎は周囲の人々から慈父（じふ）の如く慕われていて効果はありませんでした。大正８（1919）年、哲太郎が勤続 20 年を迎え、台湾人先生や生徒たち大甲街民からも勤続 20 年祝賀会を行う話が上がり、８月 10 日と定め料理も準備されました。入院中の校長は「自分が入院中なので祝賀会は遠慮してくれ」と発起人に申し入れました。生徒たちは校長には関係ないことなので予定どおり挙行しようとしたところ、校長は新たな手を打ちました。前日台中庁の教育係から哲太郎に「会に出席してはならぬ」と電話があり、教え子は憤慨し、断固やるべきと哲太郎に話しますと「命令は命令だ。しかし君たちがやると言うなら俺は出席する」と答えました。教え子たちは哲太郎の決心に感激しましたが、「先生に迷惑をかけてはいけない」とあきらめ、式典後の祝賀会は泣く泣く中止となりました。

14　任官を拒否

岡村校長

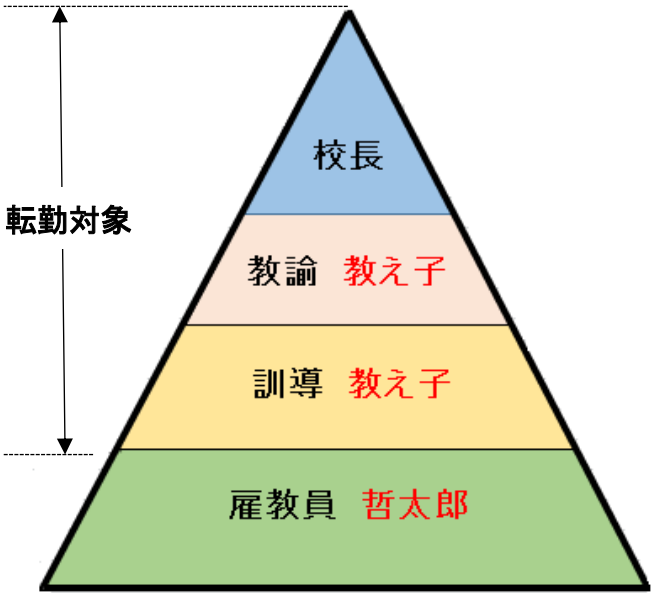
文官服に抵抗感
威圧で真の教育はできない

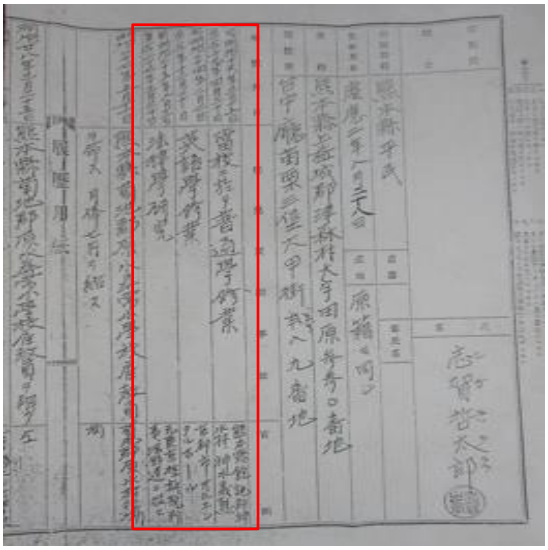


臺灣公學校官制（明治三十一年七月勅令第百七十九號ニ抄）

一　臺灣公學校ニ左ノ職員ヲ置ク
學校長
教諭
訓導
一　學校長ハ各校一人判任トス辨務署長又ハ支署長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス
學校長ハ教諭ヲシテ之ヲ兼ネシム
一　教諭ハ判任トス生徒ノ教授ヲ擔任シ校長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
一　訓導ハ判任官ノ待遇トス教諭ノ職務ヲ助ク

哲太郎

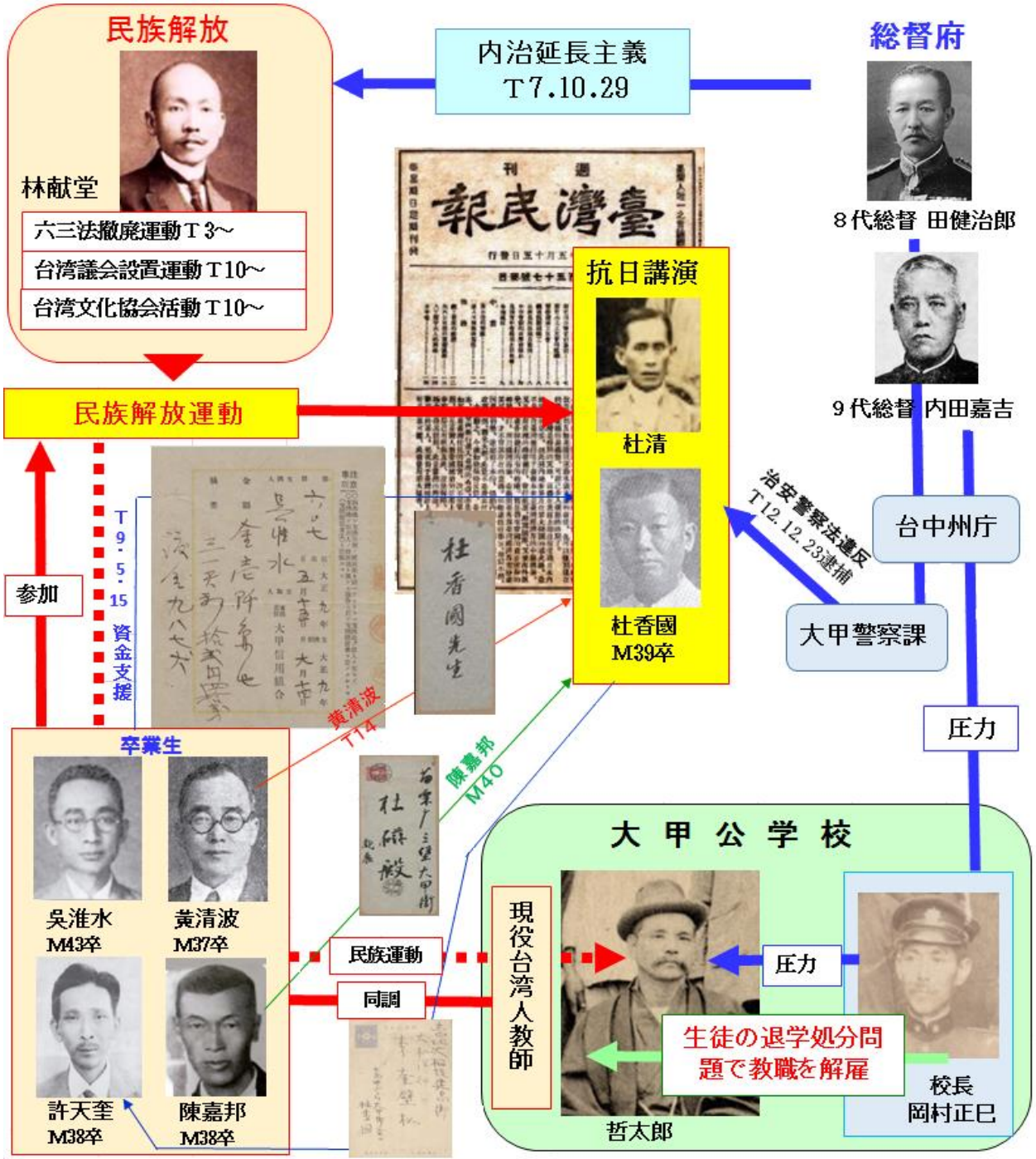




履歴に明治法律学校の記載なし
（大甲区公所提供）

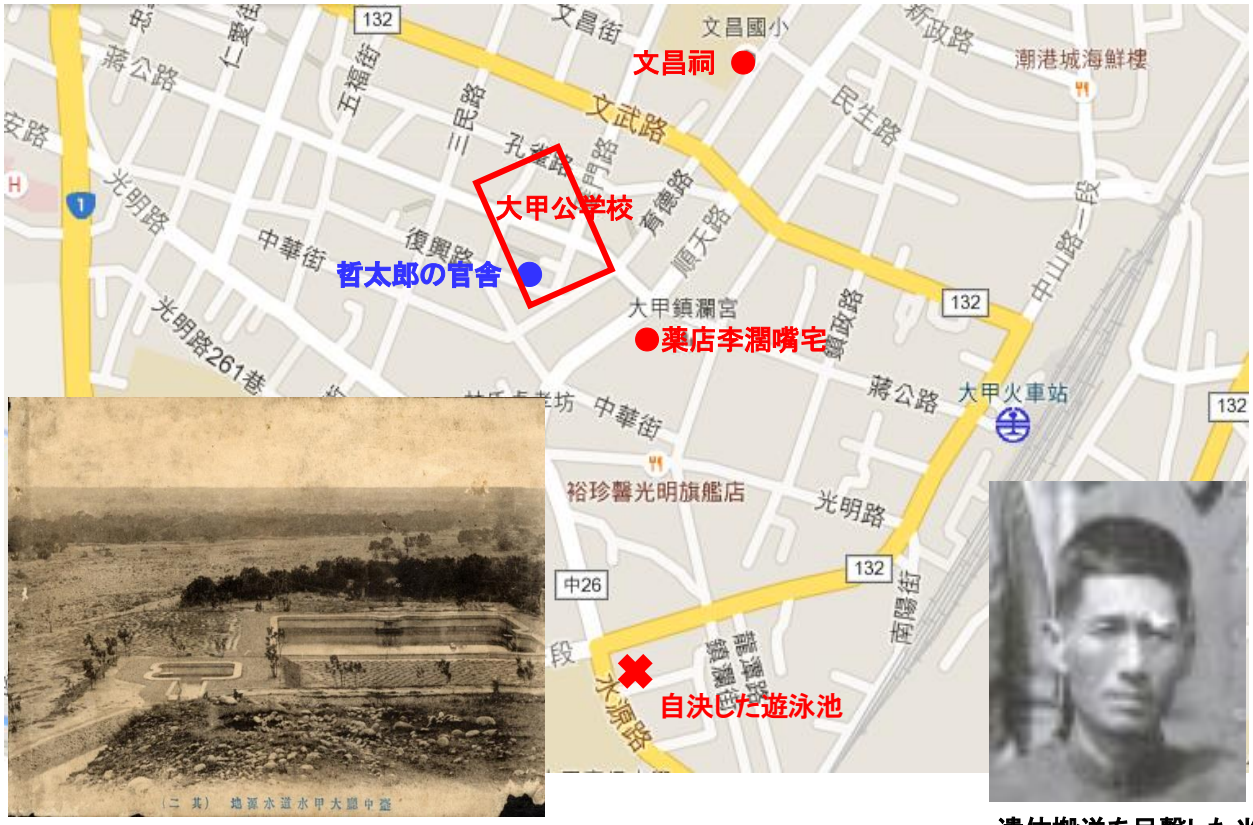
哲太郎は 26 年間、雇教員として終始しました。そして、「台湾官吏は文官服に剣を吊っているが、それでは教育は行えない。教育は威圧ではなく、子どもの知能を啓発し育てるもので、役人根性を以てこれを律することは教育の道に反する」との信念で、和服で通しました。普通なら数年で雇教員から判任官となり、文官服を着て剣を吊ります。哲太郎も、何度も正教員への勧誘を受けましたが、固辞しました。任官すると、いつか転勤しなくてはなりません。愛する大甲を離れることは絶対に拒否しました。教え子が師範学校を卒業して帰って来ると正教員となり、席次は哲太郎の上になります。しかし哲太郎は平気で、「おれは御のつく雇で、台湾の御雇(おやとい)だ」と言って誇りとしていました。また、哲太郎の履歴書（明治 43 年作成）は神水義塾普通学修業、京都市オリエンタルホール英語学修業、深野達に従い法律学研究となっており、明治法律学校での法律学専攻は記載されていません。高学歴を書けば必ず任官させられることから、そのようにしたようです。哲太郎は、半生の全てを大甲子弟の教育に捧げ、この地で終わる覚悟を決めていたのです。

15　総督府と卒業生の狭間での苦悩と教職の解雇



台湾解放民族運動の口火を切った林献堂は、郷里の台中市で運動を始めました。台中市は大甲街に近く、その運動はいち早く大甲街に流れ込みました。大甲の青年有志は「台湾民報」をむさぼり読み、林献堂が提唱する「六三法撤廃運動」は、「台湾議会設置請願運動」「台湾文化協会」へと発展拡大していきました。大甲公学校でも、生徒の保護者、卒業生、台湾人教師の大部分が文化協会に入り、民族解放を叫び、文化啓蒙運動に挺身する状況で、官憲に拘束される者も出ました。哲太郎はこの情勢を静観していましたが、運動は拡がるばかりで、総督府の一官吏として悩みました。そんな中、哲太郎は、日本人教師と言い争った生徒の退学処分をめぐって校長に掛け合いましたが聞き入れられず、哲太郎自身も教職の身分を解かれ、農場の管理者として異動を命ぜられました。

16　入水自決



大正 10(1921)年頃の遊泳池一帯
「大甲老照片専輯二」引用

遺体搬送を目撃した当時国語師範学校学生
王國楨
T19 卒

自決した遊泳池「大甲村庄史」(提供黃經業)引用

遺体をかついだ
大甲公学校　小使
李天送

大正 13（1924）年 12 月 29 日、哲太郎はいつものように 4 時に起き、羽織袴の正装で、女中の袖に「出掛けてくる」と云って、遊泳池（大正 13 年 7 月完成）に向かいました。そして遊泳池の堤に立ち、履物をそろえ、およそ 15 キロの大石を身体にくくりつけて池に入り自決したのです。池の管理人が遺体を発見し、学校へ連絡。その時の状況について、教え子の王國禎は、「私は鎮蘭宮前で薬店をしている叔父の李潤嘴（りかつすい）宅に帰省していました。その日は日曜日の朝で公学校の李天送、陳金本らが志賀先生の遺体をかついで大甲街に戻ってきたところに遭遇しました。町民は震撼し、先生の死はまたたくまに街中をかけめぐったのです」と話しています。

17 葬　儀

鉄砧山の墓地を寄贈した後の大甲鎮長
郭金焜
Ｍ４５卒

葬儀が行われた大甲公学校運動場
昭和 13(1938)年撮影
「大甲老照片専輯二（提供周振昌）」引用

鉄砧山南麓の哲太郎の墓

弔　　辞

大正１３年１２月３０日、故志賀先生の御霊前に、大甲公学校出身門下生謹みて一言を告ぐ。先生は明治３２年２月、本校に教鞭を執られ、当時の台湾、当時の大甲、悪戦苦闘２０有６年、一生一代をつくして今日における先生の大甲を建設せらる。その結果、我が大甲は血気旺盛なる青年の毛髪を白く染め当年の意気奪い、遂に悩殺して、今や鉄砧山麓に老骨を葬らんとす、嗚呼哀しいかな。聞けば往事、先生は現時中央政界に時めく政客と共に学び、共に出廬し、天下を呑まん勢なりという。その後、感ずるところありて植民地教育に投ぜられ、爾来同一の目的、同一の場所、同一の主義の下、終始一貫、２６年を一日の如く勤続し終りたり。廟堂に座し、国事に奔走し、天下に号令す、大丈夫の本懐たるは不肖これを知る。彼、高楼に入り、我れ情誼の校舎に記居す。彼、巨万の富を有するに対し、我れ数千の門下を擁す。国事に尽して可なるも、人材培養に尽すは更に可なり、国家に尽すは一にして、孰れが貴きか未だ量る能はず、不肖等、不幸にして神を識らず、只至れる人として先生を信じ疑わざるものなり、然るに名慾利情に勝つ先生は、終に健康に勝てず、今や再び芳顔を拝する時なし、志賀死すとも徳は死せず、不肖を薫化して千載に至らむとす。願わくば安らかに眠り給はむことを。

門下生　呉淮水　敬拝

台湾文化協会
呉淮水
M43 卒

葬儀は翌 12 月 30 日、教え子たちの手により急遽準備され公学校の校庭で行われました。導師は台中の日本人和尚（おしょう）大野鳳洲（おおのほうしゅう）で、教え子の呉淮水（ごえすい）ら数人が弔辞を捧げました。式場外では、媽祖祭（ばそさい）同様に千余の爆竹が鳴らされ、大甲の街は喪に包まれました。教え子と生徒たちは霊柩（れいきゅう）に随行して鉄砧（てっちん）山麓の墓地まで行きました。この墓地は、哲太郎がかねて死んだらここにと希望していたところです。葬列は 1km に連なり、沿路の商店や民家は、路傍に机を出し供物を並べ、線香を立て、金銀紙を焼き、爆竹を鳴らして礼拝し、街中の皆が嘆き悲しんで大甲の聖者を見送ったのです。

18　文昌祠入り決定と清明節

文昌祠

哲太郎関係書籍

志賀哲太郎紀念室入口

哲太郎を紹介する漫画動画

平成 26（2014）年の清明節　劉來旺大甲区長ら

大甲区の啓発用冊子等

平成 23（2011）年 12 月 30 日大甲区役所は、日本統治時代「大甲の聖人」といわれた日本人教師志賀哲太郎を「文昌祠」に入れることを決めました。蔡信豊大甲区長は、志賀先生がかつて大甲公学校で教師として 26 年間千人以上の台湾学生を教え、多大な貢献を残したため、彼を「文昌祠」に入れると発表しました。かつて住んでいた「文昌祠」西隣の一室は「志賀哲太郎紀念室」とし、肖像、本、動画などが展示されています。また、毎年 4 月の清明節には大甲区役所による志賀哲太郎の墓の清掃と祈願祭が行われています。

■ 台湾大甲訪問記

本会事務局担当　**折 田 豊 生**　（元熊本市職員）

平成 28 年２月 26 日（金）から 29 日（月）までの４日間、台湾台中市大甲区を訪問した。台湾で「大甲の聖人」として敬愛されている志賀哲太郎の墓参のため、志賀の出身地熊本の有志による志賀哲太郎先生顕彰会のメンバー7 人で、生誕 150 年を機に、事績調査を兼ねて訪台したものである。

志賀哲太郎は、熊本市の東方、益城町津森の出身で、明治 29 年に台湾に渡り、26 年間に亘って大甲公学校の教師として尽力し、台湾の発展に寄与した幾多の人材を育て上げた伝説的人物である。植民地台湾にあって少しも現地の人々を差別することなく、同じ人間として尊び、自らは禅僧のような謹厳さを以て人々に接したと言われている。志賀が説いた教育の３つの柱は、「慈悲」「倹約」「謙虚」であるが、志賀は、教育に対する理解が殆どなかった台湾において、子供達の人格育成に重きを置き、実践的教育を通して、この街の文化的基礎を形作った神様のような存在として語り継がれているようだった。

大甲区は人口約８万人の街で、台中市の中心街から北の方に約 30km 離れたところにある。大甲区公所（区役所）に着くと、10 余人の職員の皆さんが出迎えて下さり、大きな応接室に通されて盛大な歓迎セレモニーが行われた。

訪問団の澤田寛旨（ひろし）団長が訪問の趣旨を述べ、大甲区公所の劉來旺区長が歓迎の挨拶をされた後、配布された数種類の啓発パンフレットや図書の説明が行われ、「大甲的聖人　志賀哲太郎」というアニメーションビデオの放映もして頂いた。話には聞いていたものの、熊本では殆ど無名に近い人が台湾で格別の扱いを受けていることを目の当たりにし、驚きと感謝の念を以てそれらの説明を伺った次第だった。澤田団長が志賀哲太郎の遺族（妹の孫）であることをお伝えすると、一様に感嘆の声が上がった。

翌朝、再び大甲区公所を訪れ、東方の街外れに位置する鉄砧山（てっちんざん）に案内して頂いた。鉄砧山は台湾の英雄、鄭成功を祀（まつ）ってある標高 300m余りの山で、その中腹に志賀哲太郎の墓と顕彰碑があった。休日にも拘わらず、公所の皆さん 10 余人が公用車で同行して下さり、公所と訪問団合同の墓前祭が厳粛に執り行われた。

訪問団が持参した益城町潮井水源の湧水をお供えし、澤田団長が祭文を奉読し、白濱裕副団長が明治天皇御製を拝誦した後、大甲区公所で用意して下さった日本酒と花を捧げ、全員で焼香した。

志賀哲太郎の墓の傍に、かつて女中として仕えた島村ソデ（熊本県河内町出身と言われている）の墓があり、こちらでも同様に墓前祭が執り行われた。

墓前祭を終えた後、志賀哲太郎ゆかりの地（文昌祠、大甲国民小学、鎮瀾宮、自裁の地・水源路等）を順次案内して頂いた。

公所の皆さんの振る舞いには少しも義務的なところがなく、一つ一つの行いに心が籠っていて極めて好ましい印象を受けた。２日間の一連の交流を通じて、志賀哲太郎に対する大甲区の人々の思いの深さを知らされるとともに、頂いた数々の資料や関連施設の展示からも、志賀が当地で果たした業績の大きさを思わされた。出身地熊本では殆ど無名に近いのだが、この距離感を是非とも縮めたいものである。

旅行の最終日には台北市郊外の芝山巌を訪れた。ここは、台湾統治開始直後最初に教育事業に携わり、非命に斃れた６人の日本人教師（六氏先生）の墓があり、その後塵を拝して台湾の教育に命を捧げた多くの日本人教師が祀られている。台湾教育の象徴的聖地であるその山の石碑にも志賀哲太郎の名前が彫り込まれており、志賀の業績の大きさがあらためて思われ、深い感慨を抱きながら山を下ったことだった。

■ 本会代表訪台時の台湾の新聞 「台中報道」 の記事

平成 28 年 2 月 26 日・27 日の両日、本会代表 7 名が台湾台中市大甲区を訪問。27 日に大甲区公所と合同の墓前祭を行った。

これは、当時の現地新聞「台中報道」に掲載された新聞記事である。

日籍志賀哲太郎顯彰會　大甲參訪志賀優良事蹟

記者陳榮昌／台中報導　　2016.02.27 / 16:20

志賀哲太郎對大甲文化教育有極大貢獻,志賀日本顯彰會在大甲區長劉來旺等人員陪同祭拜「大甲聖人」志賀哲太郎，並至文昌祠參觀紀念館。記者陳榮昌／攝

日本志賀哲太郎顯彰會七位熊本縣團員，兩天來在大甲區公所人員陪同，到志賀哲太郎的墳墓祭拜、並參觀志賀紀念館。團長澤田寬旨表示，志賀哲太郎被稱為「大甲聖人」讓他們感到無比榮耀，希望與區長劉來旺就兩地文化、產業及觀光做有效益的交流。

日籍教師志賀哲太郎，生於慶應二年八月二十八日熊本縣上益城郡津森村，是打鐵之家，幼年遭遇兵荒馬亂之苦，年青時在日本無法發揮志向，日政府在馬關條約取得台灣後即到大甲生根落戶，明治三十二年(一八九九年)，志賀擔任大甲公學校代用教員，任職二十六年，教過的學生多達千餘名，並常調民眾不少糾紛。

則眼看所教的學生常因故退學，加上內心夾雜國家與師生情感之衝突下，造成神經衰弱，到大甲溪的小山丘山腳水源地池邊，排好木屐後，躍入池中而亡。因志老師對大甲文化、教育有相當貢獻，低逝後即被稱為大甲聖人，學生或後代每都會到墳前祭拜、掃墓，近幾年來區公所也在文昌宮左廂房設置志賀老師紀念館讓後人瞻仰緬懷。

日本熊本縣七位志賀哲太郎顯彰會團員，在外交部安排，於二十六日下午至二十七日參訪大甲區公所，受到地方熱烈歡迎，座談會中觀賞志賀一生卡通版，凸顯志賀為大甲不遺餘力的付出，致團長、亦是志賀孫子澤田寬旨感觸良多，表示熊本縣根本不知他在國外的事蹟，致區長當提供這部影片讓其帶回宣揚。

二十七日上午八時許，一行到鐵砧山南麓志賀哲太郎墳前祭拜，儀式，獻花、獻酒十分隆重，祗讀三張祭文就花去二十分鍾，顯示對志賀的尊敬。隨後並參觀志賀投水之大甲游泳池、前大甲公學校、鎮瀾宮、大甲國中再到志賀老師紀念館參觀，全程一行猛拍照片留念，對志賀事蹟更是問之不絕，在午餐時候，團長直說這次行程有極大收獲，相當滿意，祈望劉區長策畫兩地的觀光、文化及產物交流要盡快執行，相信兩地民會有滿足的收益。

【翻訳文】

日本籍志賀哲太郎顕彰会　大甲にて志賀のすばらしい業績を参訪する
（2016.02.27　記者陳栄昌/台中報道）

志賀哲太郎は、大甲文化教育に対して大いなる貢献をしている。志賀日本顕彰会は、大甲区長劉来旺らと同行して「大甲聖人」志賀哲太郎を礼拝し、また、文昌祠において記念館を参観した。（記者陳栄昌/撮影）

日本志賀哲太郎顕彰会熊本県団員７人は、両日、大甲区公所の人達とともに志賀哲太郎の墓に参り、志賀記念館を参観した。団長澤田寛旨は、志賀哲太郎が「大甲聖人」と称され、彼らに無類の栄光を感じさせたことを述べ、区長劉来旺に対して、互いの文化、産業及び観光に有益な交流があるよう希望した。

日本籍志賀哲太郎は、慶応２年８月28日熊本県上益城郡津森村に生まれ、家は鍛冶屋で、幼少期は兵荒馬乱の苦難に遭い、青年期は日本で志望を実現することなく、日本政府が下関条約締結で台湾を取得後、すぐに大甲に居住した。明治 32 年（1899 年）、志賀は大甲公学校の代用教員として赴任し、26 年間その職についた。学んだ学生は 1,000 余名に達し、民衆のいざこざを解決することも少なくなかった。

教え子の学生が事情により退学するのを目の当たりにし、加えて国家と教師と生徒との感情の衝突があるなかで、精神的に衰弱し、大甲川の小山のふもとの水源地のほとりで、履物をそろえ、入水し亡くなった。先生は大甲文化、教育に対し、相当の貢献があり、亡くなられた後すぐに、大甲聖人と称され、学生や後の世代の人々は、いつも墓前での礼拝と清掃を行っている。近年来、区公所も文昌宮左廂房に志賀先生記念館を設置し、後世の人々はここに参り、深く思いを馳せている。

日本熊本県志賀哲太郎顕彰会団員７人は外交部の配慮により、26 日午後から 27 日にかけ、大甲区公所を参観し、熱烈な歓迎を受け、座談会において、志賀一生のアニメ版を観賞し、志賀が大甲のために尽力したことを理解した。団長で志賀の妹の孫・澤田寛旨は、熊本県の人々は彼の国外での業績を全く知らないので、これらの資料を提供して貰い、持ち帰って伝えたいと区長に表明した。

27 日午前８時、一行は鉄砧山南麓の志賀哲太郎墓前で、厳粛に礼拝、儀式、献花、献酒を行い、慎んで３枚の弔辞を読み上げ、20 分を費やして志賀に対する敬意を表した。そして、志賀が入水した大甲プール跡、大甲公学校、鎮欄宮、大甲国中を見学し、再び志賀先生記念館の参観を行い、記念写真を撮り、志賀の業績が今後も途絶えることのないことを願った。昼食時、（澤田）団長は、「今回の旅行は大きな収穫があり、満足である。（益城町と大甲の）双方の観光、文化及び物産交流の施策を通じ、双方が満足する利益になることを希望する」と劉区長に話した。

◆ ご協賛のたくさんの広告、ありがとうございます。 ◆

麦わら帽子
いくばい 益城笑店街！
笑顔あふれる町づくり
を頑張ろう！
〒861-2242
益城町木山字居屋敷 405-1

株式会社 ナルミアドバンス
代表取締役 澤 村 和 廣
〒860-083 熊本市中央区平成 3-17-20
Tel.096-379-2820 Fax.379-2746
Mobile.090-7455-6579
http://www.763.co.jp
mail. narumi-a@ninus.ocn.ne.jp
●店舗の内装デザイン・設計・施工
●住宅のデザイン・設計・施工・リフォーム

日立・ナショナル
西山電器
益城町宮園 524-2
TEL.286-5307
FAX.202-5821

熊本日日新聞
㈲熊日益城販売センター
惣領店㈹ ☎286-2453 惣領1487-3
FAX287-1119
木山店 ☎286-2056 木山388

地域とともに豊かな未来
熊本第一信用金庫
益城支店
〒861-2242 上益城郡益城町木山 363-1
Tel 096-286-6511 Fax 096-286-0006
http://www.daiichishinkin.co.jp

㈲葬祭公社 全葬連加盟店 コープ熊本指定店
斎場 益 城 会 館
小斎場 東館・家族館
http://mashiki.net
益城町安永 652 ☎ 286-2258

電気工事・計装工事・空調工事・太陽光発電設備工事
株式会社 西 田 電 工
代表取締役社長 西 田 隆 一
本 社 〒861-2118 熊本市東区花立４丁目 11-27
TEL(096)282-8580 FAX(096)282-8580
益城支店 〒861-2244 上益城郡益城町寺迫 1338-3
TEL(096)286-8664 FAX(096)286-8763
合志支店 〒861-1102 合志市須屋 357-6
TEL(096)343-7758 FAX(096)286-8763
E-mail：dendentakaichi@ceres.ocn.ne.jp

株式会社
イズミ車体製作所
毎日を健康で生き生きと・・
人に優しい社会の実現を目指します！
代表取締役会長 古 庄 忠 信
〒869-1222 菊池郡大津町大字岩坂 3258-4
TEL. 279-1733(代) FAX. 279-1666

NISSO KENZAI 株式会社 日創建材
代表取締役社長 青 柳 善 久
〒861-2244 熊本県上益城郡益城町寺迫 1209-1
TEL 096-286-1211(代) FAX 096-286-1255
ERA REAL ESTATE JAPAN
LIXIL不動産ショップ
人と街を結ぶ地元の不動産
イーアールエー ミトモ
美智商事 株式会社
TEL 286-8200
FAX 289-8670
取締役専務 青 柳 剛

活力に満ちあふれた
“ふるさと熊本”の創生のために
熊本の復旧・復興、そして未来づくりのために
役職員一丸となって取り組んでまいります

木山支店　Tel 096-286-3121
広安支店　Tel 096-286-0211

肥後銀行
HigoBank

おいしい野菜とくだもの
吉本商店
益城町宮園709
TEL 096-286-2131
FAX 096-286-0625

〒861-8072　熊本市北区室園町12番10号　TEL 096-344-3000　FAX 096-343-7570　朝日野会　検索

系列病院
十善病院　熊本市中央区南熊本 3-6-34　TEL 096-372-2688
球磨病院　人吉市上青井町 176　TEL 0966-22-3121
人吉中央温泉病院　人吉市上青井町 170-1　TEL 0966-24-2854
博愛会病院　熊本市中央区紺屋今町 4-3　TEL 096-325-2233
光生病院　人吉市下原田町 1125-2　TEL 0966-22-5207
球磨村診療所　球磨郡球磨村一勝地甲 77-17　TEL 0966-32-0377

医療法人社団　福田会
ふくだ整形外科
院長　福田　朋博（日本整形外科学会　整形外科専門医）

＜診療科目＞整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科

診療時間

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前9：00～12：30	○	○	○	○	○	○
午後2：00～6：30	○	○	○	／	○	4時まで

☆運動器リハビリ　☆脳血管疾患等リハビリ　☆超音波エコー診断
☆骨粗鬆症検診（腰椎での骨密度測定）　☆筋力強化訓練・有酸素運動の指導

電話(096)286－7391
上益城郡益城町馬水805
＊健軍電停より木山方面へ車で10分・上野添バス停前

ましきクリニック

耳鼻咽喉科

はな　のど　みみ

http://www.mashiki-clinic.com/

益城町惣領交差点　TEL 096-287-8733

はしぐちせきちょうこうぎょう
株式会社 橋口石彫工業

《石工事全般》　墓石　納骨堂　文化財・記念碑・造園・神社仏閣石工事等
墓碑クリーニング　墓碑リフォーム

創業明治５年。130 年あまり続く石材店です。お客様の想いを大切にしたお墓づくりを始め、建築工事、彫刻品等の様々な石材工事に、熟練した社員が蓄積された技術を活かします。

営業時間：午前９時～午後５時　　定休日：火曜日

【本社】〒860-0078 熊本市中央区京町 1-3-5
TEL.096-324-1122　FAX.096-324-1123
E-mail: ishi@hasiguchi.co.jp

【展示場】〒861-4151 熊本市南区富合町清藤 43-1
TEL.096-320-4730　FAX.096-320-4735
E-mail: tomiaiten@hasiguchi.co.jp

益城空港霊園

㈲マツノコーポレーション

上益城郡益城町木山 321-1
Tel.096－289－6610

特定建設業

有限会社 城下工務店

代表取締役 城 下 良 一

〒861-2202 上益城郡益城町田原 167
TEL 096-286-5115　FAX 096-286-0041

日本医療機能評価機構認定病院（第PA18-4号/3rdG:Ver.1.1）

社会医療法人ましき会

益城病院

理事長　犬飼邦明
院　長　松永哲夫

精神科・心療内科・小児科（児童思春期）・歯科

〒861-2233　上益城郡益城町惣領１５３０　TEL：096-286-3611

- 熊本県認知症疾患医療センター
- 訪問看護ステーション
- 指定相談支援事業所 地域活動支援センター「アントニオ」
- 高齢者グループホーム「ふるさと」
- 特別養護老人ホーム「花へんろ」
- 養護老人ホーム「花へんろ」
- 就労支援事業
- 宿泊型自立訓練事業所「コスモ」

ひろやすクリニック
〈内科・消化器科・循環器科〉
院　長　永田　美与

温かい御支援
ありがとう
ございます！

吉川公認会計士事務所

代表　吉川栄一

公認会計士・税理士
㈳日本医業経営コンサルタント協会
認定登録医業経営コンサルタント

〒860-0863　熊本市中央区坪井 1-3-44　緒方ビル２Ｆ
TEL. 096-283-8020　FAX. 096-283-8021

Yoshikawa C.P.A Office

緑豊かな安らぎのある暮らしをお手伝いします！

㈲渡邉産業

総合造園・設計・施工管理
熊本県造園建設業協会会員

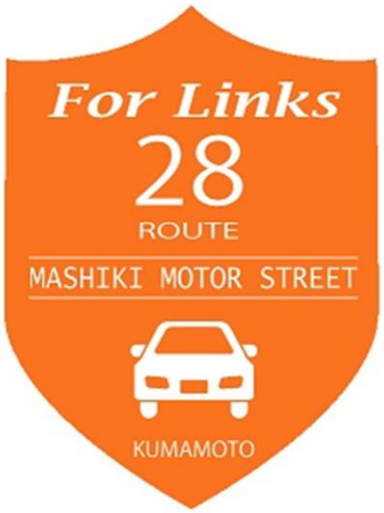
一級造園施工管理技士　渡邉英博（専務取締役）

事務所　〒861-2204 上益城郡益城町小谷373－2
TEL（096）286－9033　FAX（096）286－9595

For Links

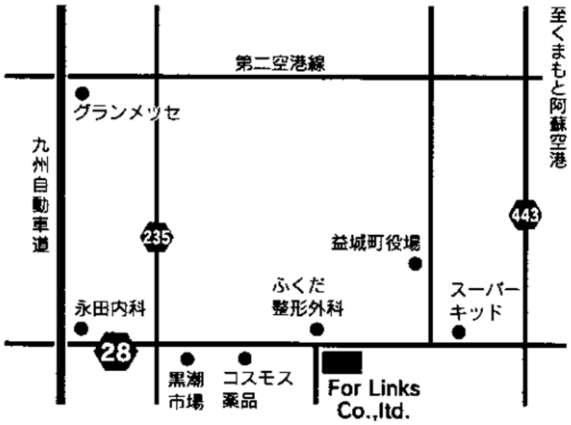
Co.,Ltd.

フォーリンクス



Service menu

- 新車・中古車販売（国産・輸入車）
- オークション代行 － 注文販売
- 車両買取り
- 車検・整備
- 鈑金・塗装
- オーディオ販売・取付け
- カー用品販売・取付け
- 各種保険取扱い



代表　藏　田　誠　二

〒861-2231 上益城郡益城町安永 558-4
Mobile. 090-2710-0312
Tel. 096-287-4040　Fax. 096-287-2020
www.for-links2016.com

医療法人社団 広崎会
さくら病院
SAKURA HOSPITAL

〒861-2236
益城町広崎 1445-15
☎ 096-286-8111(代)
FAX 096-286-8362

阿蘇外輪山が拡がる恵まれたロケーションに加えて設備も一新し、快適な入院生活の提供に努めています。多様化するニーズに対応すべく、人口呼吸器 30 台・透析装置 29 台・各種監視装置と共に豊富な知見と技術を駆使して地域密着型の病院として邁進しています。　院長　大 塚 裕 一

診療科目

内科・呼吸器内科・代謝内科・腎臓内科・
感染症内科・人工透析内科・消化器内科・
循環器内科・リハビリテーション科・
放射線科

製材・一般建築木材・外材
木材加工・木工品製造販売・建材

㈲ 清水木材

〒861-2204 上益城郡益城町小谷 136
Tel 096-286-6017　Fax 096-286-4345

SVC ソフトウエアビジョン株式会社

◆システム開発
◆アプリ開発
◆SE サービス
（準委任、派遣）

〒862-0926 熊本市東区
保田窪 3-15-5 SVC ビル
TEL.096-381-1565
FAX.096-385-2157

BRIGHT
©2010熊本県くまモン
熊本県ブライト企業認定

私達も応援しています。

永井雄二　一村トモ子
白石州子　酒井陽子
長尾美智子
木山整骨院
南花園（本田洋志）
谷口和子　大矢野陽子
永瀬久代　高橋元子
㈱益城開発

近くでもお気軽にご用命ください。
安心と快適をのせて。
熊交観光タクシー
フリーダイヤル
0120-07-1123
携帯・PHS OK
※携帯・自動車電話・PHSからもご利用になれます。
本所 熊本県上益城郡益城町広崎789　TEL 096-286-1123
・花園営業所 ・栄通り待合所 ・水前寺待機所 ・木山待機所

■ 会員募集

会員を募集しています。
歴史の好きな方、大歓迎です。ただし、本会は、個人的な研究発表や学習の場ではありません。また、政治的・思想的・宗教的活動もできません。
本会の活動は、志賀哲太郎に関係する教育・文化・産業振興及び地域・国際交流を目的としたボランティア活動です。多くの皆様の善意のご協力をお願いいたします。

◇正会員
・会の運営に参加し、発行物の提供を受けることができます。
・月例開催の会議に参加していただきます。（できる範囲で結構です。）
・年会費は、3,000 円です。

◇賛助会員
・会の活動を側面から任意にサポートしていただきます。
・会の活動状況の報告、発行物の提供を受けることができます。
・年会費は、2,000 円です。

◇協力会員
・広報など、近隣の会員の活動を臨時にサポートしていただきます。
・臨時に発行物の提供を受けることができます。
・年会費は、不要です。ただし、任意のご寄付は大歓迎です。

【志賀哲太郎顕彰会の歩み】

H27.09.06	発足（会長：松野國策=熊本県文化功労者・熊本歴史学研究会会長） 月例会議において諸課題を検討。
H28.02.26-29	代表者 7 名が台湾台中市大甲区を訪問 （大甲区長表敬訪問・志賀哲太郎墓前祭催行・資料調査等）
H28.04.14	熊本大震災により活動中断 （5/28 に開催を予定していた志賀哲太郎顕彰講演会は平成 30 年に延期）
H28.08.07	臨時会議
H28.11.16	月例会議再開
H28.12.29	松野國策会長逝去
H29.01.14	新会長選任（会長：宮本睦士=益城の歴史遺産を守る会会長・元小中学校校長）
H29.02-	県内各地で志賀哲太郎パネル展を巡回開催
H29.03.05	益城町保健福祉センターで「志賀哲太郎研修会」開催（約 100 名参加）

■ 志賀哲太郎顕彰会

事務局　〒861-2242　益城町木山 556 番地 20　植山方
（電話）096-286-8268

【お問合せ先】
事務局長　植 山 洋 一　〒861-2242　益城町木山 556 番地 20
（電話）090-1087-6213 E-mail：ueyama-1@seagreen.ocn.ne.jp
事務局員　折 田 豊 生　〒861-2232　益城町馬水 848 番地 10
（電話）090-8399-4854 E-mail：olita@lep.bbiq.jp